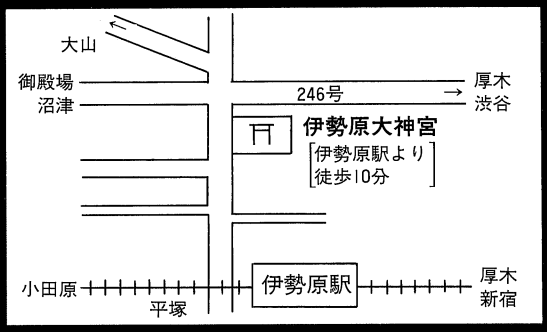
伊勢原大神宮

伊勢の神宮と同じく内宮（左）と外宮（右）のある伊勢原大神宮

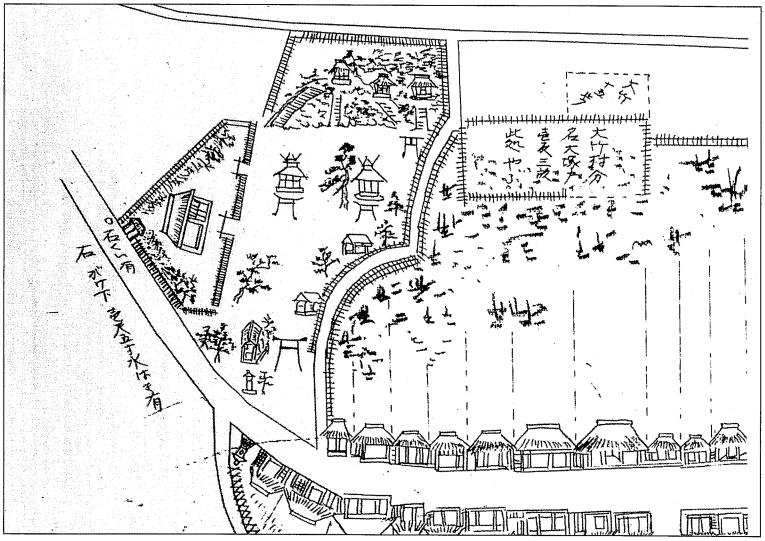
伊勢原大神宮参拝略図



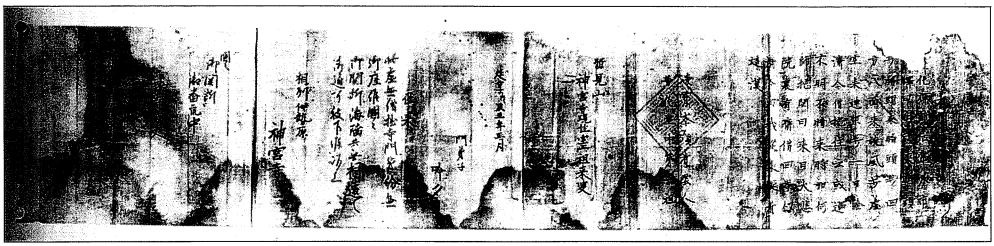
大神宮境内スナップ

関東大震災以前の御社殿（上）

江戸時代後期の境内図（下）



虚無僧取締證文（堀江家蔵）



空山租来発給往来切手

六月大祓

例祭こどもみこし

十二月だるま市

伊勢原大神宮史

小松　馨　著

伊勢原大神宮　発行

序文

宅野　正儀

伊勢原大神宮のあるこの地一帯は、昔〝千手が原〟と呼ばれたそうでございます。三百七十年昔、伊勢の国人、山田曽衛門が、この地に宿った時、一晩中耳許に聞いたやさしいせせらぎは、あの五十鈴川の水音に通い、翌朝ふり仰いだ大山の霊峰は、あの朝熊山を思わせたのかも知れません。

やがて、伊勢人はここに移り住み、故郷の大神宮をおまつり申しあげ、この地も〝伊勢原〟と名づけられたと申します。

昭和五十八年、ご神縁あって宮司に就任させていただいた私は、このお話を伺って、身の震えるような感激を覚えました。日本国民の全てが崇敬申しあげる、あのお伊勢さまと、そのような深い関わりを持つ神社の宮司を拝命する光栄に浴したからでございます。

当時〝神明社〟であった神社名が故山田亀夫氏をはじめ、白井永二先生（神社庁長）、歴代総代各位、地元の世話人関係者の方々、その他多くの方々のご協力をいただいて、昭和六十一年、正式に〝伊勢原大神宮〟となりましたことは、望外の喜びでございました。

以来、大神宮にふさわしい〝外面〟美化のため、境内整備をおし進めている所でございます。

この度、國學院大学講師である小松馨先生によって、見事に完成された、この『伊勢原大神宮史』は、大神宮の〝内面〟を説き明かしている、画期的な書物でございます。

この『大神宮史』によって、今まで不明であった、隠されていた大神宮の歴史が明らかにされ、私ども神社関係者のためばかりでなく、伊勢原郷土史のためにも、大変な貢献をすることになりました。私どもにとりまして、まことに嬉しいことでございます。

この『大神宮史』を、伊勢原大神宮創祀三百七十年と、平成のご大典、この二つのよろこび事を奉祝して出版することができましたのも、小松馨先生のご研究と、総代各位、氏子崇敬者の皆さまのご協力があったからでございます。

ここに、改めて、お力添え下さった多くの関係者の皆さまに、厚くお礼申しあげるとともに、この

書物ができる限り多くの方々に読まれ、できる限り多くの方々のお役にたつことによって、わが〝伊勢原大神宮〟がより明るい未来に恵まれ、より輝かしい発展を続けて行くことを、心から願って止みません。

この本の読み方

この本は、一般の方に読みやすいように、なるべく簡単な表現をするよう心がけましたが、神社や神宮寺の歴史には、特種の用語も出てきます。それらの言葉には㊟の符号をつけました。㊟は巻末に五十音順に掲載されています。

また、読みにくい文字には「ふりがな」をつけました。ただ、前に一度ふりがなをつけた文字には、何度も重ねてつけることはしませんでした。ふりがなで正しい読み方を覚えて、㊟で神社の用語や、歴史に関する古い言葉を覚えてください。

編集者

目次

序文……一
はじめに……九
第一章　伊勢原大神宮正史
三百八十年の歴史……一二
『愛宕山権現鐘序及銘』と『新編相模国風土記稿』に見える創建の事情……一九
元和の伊勢踊り流行と伊勢信仰のひろがり……二三
伊勢信仰のひろがりと伊勢原神明社の創建……二八
江戸時代の社殿と御神像……三一
近代以降の伊勢原神明社……三五
村社列格と幣帛供進社の指定……三八
関東大震災と神明社……四〇
昭和の時代……四六
神明社から伊勢原大神宮へ……四八

第二章　御祭神
神々の生いたち……五四
内宮
天照皇大御神……五六
天照皇大御神のご誕生……五八
アマテラスオオミカミとスサノオノミコト……五九
天の岩戸隠れ……六三
ニニギノミコトの天孫降臨と宮中でのアマテラスオオミカミの奉祭……六六
神武天皇の御東遷とアマテラスオオミカミ……六七
崇神天皇の御敬神と笠縫邑への遷座……六八
伊勢御鎮座……六九
外宮
豊受姫大神……七一
アマテラスオオミカミに呼ばれて……七二
第三章　伊勢神宮と神宮信仰

伊勢神宮の性格……七三
古代氏族と氏神……七四
伊勢遷座とその意味……七五
律令国家とアマテラスオオミカミ……七六
伊勢神宮のお祭りと朝廷のお祭り……七八
二十年に一度の式年遷宮……八〇
伊勢原大神宮の遷宮……八三
第四章　神宮をめぐることども
平安時代から鎌倉時代にかけての神宮信仰……八五
諸国の神明社……九一
飛び神明と神明社の建立……九三
伊勢参宮の風習……九五
第五章　伊勢原の神宮寺について
神宮寺と大覚院……九七

（イ）　神宮寺
『新編相模国風土記稿』に見える照見山神宮寺（97）普化宗小史（98）神宮寺小史（104）
普化宗が追放されて（111）大神宮境内に残る神宮寺の遺跡（114）
（ロ）　大覚院……一一八
第六章　年中行事
年間の祭礼……一二二
現在の年中行事……一二六
境内にある神社……一二九
あとがき……一三四
参考文献……一三七
大神宮おはやし……一四一
昭和四十二年以降歴代総代名……一四六
注……一四八

はじめに

伊勢原大神宮（旧神社名　神明社㊟）は、天照皇大御神（アマテラススメオオミカミ＝アマテラスオオカミ）と豊受姫大神（トヨウケヒメオオカミ＝トヨウケノオオカミ）をおまつりしている由緒ある神社です。伊勢神宮では、天照皇大御神が内宮㊟に、豊受姫大神が外宮㊟にそれぞれおまつりされていますが、このお宮も伊勢神宮にならい、両大神さまが両宮別々におまつりされています。伊勢の内宮・外宮の神さまをおまつりしている神社はたくさんありますが、伊勢と同様に内宮・外宮二つにわけて御社殿を設けている例はたいへんめずらしいといわれます。

しかも伊勢原大神宮の両宮にわけておまつりする社殿形式は古く、江戸時代の本にも伊勢原大神宮はこの形式をとっていたという記録が出ています。

当社の鎮座地㊟は、神奈川県伊勢原市伊勢原三―八―一で、小田急線伊勢原駅の西方のもっともにぎやかな市街の中心にあたります。昔から霊峰大山㊟参詣㊟の重要拠点として大いににぎわい、今日

でも神社の周辺は、伊勢原市の社会経済の中心として市の機能の拡大とともにますます発展しています。そのような中に残っている緑豊かな大神宮の境内（けいだい）はよく整備され、氏子（うじこ）注・崇敬者注はもとより、ひろく市民にいこいの場として愛されています。

ところで皆さんは、伊勢原大神宮と伊勢原という地名が、神さまを中心に切っても切り放せない深い関係があることにお気づきだったでしょうか。代表的な地名辞典に、伊勢原の地名のおこりを見てみると、次のように出てきます。

伊勢原台地の西部に位置する。地名は、伊勢国（現三重県）の住人が当地を開墾したことによると伝えられている。

（『角川日本地名大辞典』）

『風土記稿』は、元和六年（一六二〇）に伊勢国からの移民者の命名とする。

（『神奈川県の地名』日本歴史地名大系十四巻）

これらの辞典によれば、伊勢の国からやってきた人が開墾した原であるために、当地を十七世紀ごろから伊勢原と呼ぶようになったとあります。ところで古い本によると、伊勢からやってきてこの地

を開いたのは、山田曽右衛門（そえもん）という人だとも伝えられております。

曽右衛門は開墾に成功すると、この地に故郷伊勢の大神さまを勧請（かんじょう）㊟し、一村の鎮守（ちんじゅ）㊟といたしました。そして、当社の社名にちなんで、開墾地を「伊勢原」と呼ぶようになったと伝えられているのです。このようにして、伊勢原大神宮（当時は神明社㊟といっていました）と伊勢原の歴史は、はじまりました。

それでは、どのようないきさつで伊勢原という土地が開かれ、ここにお宮が創建㊟されるようになったのでしょうか。当社でおまつりしている伊勢の大神さまとはどういう神さまなのでしょうか。また、伊勢の大神さまをおまつりする当社には、どんな歴史が秘められているのでしょうか。神社の歴史を見ながら、こういったことに触れていきたいと思います。

第一章　伊勢原大神宮正史

三百八十年の歴史

伊勢原大神宮の御創建(注)の歴史をたどってみると、江戸時代初期の元和(げんな)年間(一六一五～一六二四)にまでさかのぼることができます。今から三百八十年ほど前にあたるでしょうか。

神社がはじめてまつられた当時を伝えるいくつかの史料をたどってみると、伊勢原大神宮は伊勢神宮の神々をまつる神社の一般称号「神明社」と称していたようですが、この伊勢神宮の神さまをまつる神社があることから、今、私たちが何気なく使っている「伊勢原」という地名が生まれたと書いてあります。伊勢原大神宮はこのように、地名の起源にもなった由緒ある神社なのです。

もっとも、古い文書には様々のことが書いてあるもので、たとえば「はじめに」の章で紹介しました『地名辞典』を見ると、伊勢原の地名について別の説も掲載してあります。それは

元和六年（一六二〇）に伊勢の国の住人が大竹村の秣場(まぐさば)㊟を開墾し立村と伝えるが、慶長年間（一五九六～一六一五）のものと推定される『実報院諸国旦那帳(じつぽういんしょこくだんなちょう)』には、実報院の所有する熊野先達(くまのせんだつ)㊟職の地の一つに「伊勢原町」の記載が見える。

（『角川日本地名大辞典』）

伊勢原の地名は、近世初頭の成立と推定される『実報院諸国旦那帳』に「伊勢原町」とみえる。

（『神奈川県の地名』日本歴史地名大系十四巻）

などという、神社ができたとされるほんの少し前に、すでに伊勢原の地名はあったという説です。それが真実とすると、「伊勢原」という地名は、神社ができる前からあったことになってしまいますが、この説は歴史的に不確実といえましょう。

というのも、『実報院文書』にはこの文書が完成したとされる時代より何十年ものちのことまでが書かれています。たとえば貞享(じょうきょう)という五代将軍徳川綱吉(つなよし)のころの年号（一六八四～一六八七）なども過

去のこととして記されていて、一体いつごろの作なのか、史料は正しいのかが不明確ですし、正統な歴史をつづる正確な史料としては扱いがたいものです。未来のことを過去形で書くことはないし、本は後で作られたのか、書き直されたものと考えられます。

さらに、最近、伊勢原市史編纂委員会委員の小野鉄朗氏が、明暦二年（一六五六）の検地帳㊟から町並みを復元されました。そしてその結果、伊勢原という地は周辺の村々の流通の中心として、宿場や市場という性格をもっており、近世の初頭に代官の呼びかけで成立した可能性が強いと、実証されました。また、明治大学の圭室文雄教授は相模の国（神奈川県）の高野山における宿院高室院の古文書の調査をされていますが、教授の御教示によれば、同院の慶長年間末年までの文書に「伊勢原町」という地名は見えないということです。そうすると、伊勢原の成立は江戸時代のはじめだという、私たち神社関係者の考えてきた説が正しかったということになるのではないでしょうか。

では、江戸時代のはじめ、どんないきさつで伊勢原という町ができ、伊勢原大神宮が成立（創建）したのでしょうか。これに関しては『当村草分立初覚』という延宝八年（一六八〇）に、草分け㊟の一人であった湯浅清左衛門の孫で、名前も同じ清左衛門が書いた、この地に伝わる最古の文書があり

ます。そこには伊勢原の開墾のいきさつが次のように記されています。

前々ハ千手原と申小松原ニ而、松数九千九百本うハり、松原我祖父鎌倉より大山へ度々致参詣、上下ニ見立水近く候ハバ、山屋地ニ可然思、一夜わらを枕ニいたし、原に寝、水音きき候へバ、近ク候間、御支配所承り候へは、御両（料）所ニ而御手代中原ニ成瀬五左衛門様御支配と承り、わうじ山屋地ニ願ひ候へば　いかにもかつハ御公儀様御為ニ成り候、早々御書付去年親ニ被下候、いただき奉り候時分ハ元和五年己未二月中成、草分㊟表二十間ニ裏に百間通りさくりあて、家作り粟まき一軒屋ニ而松原ニ十月末迄居申候得ハ、粕屋辺より屋敷不持衆　四五人参屋敷もらひ、国所かまひなきせんぎ致　屋敷くれ、我井ノ水をのませ　家々作置、町並罷成申候、初わうじ草分屋敷ハ曽右衛門殿・弥兵衛殿迄表通り二十間口ニ而御座候、

（括弧内訳者）

要約すると、鎌倉の人湯浅清左衛門が、たびたび鎌倉より大山参詣をしていましたが、途中、常々目をつけていた松原千手原に、ある晩野宿し、水音を聞いて開墾可能なことを知り、当時このあたりの幕領㊟を支配していた中原代官成瀬五左衛門に開墾許可を願い出ました。開墾するのは公儀㊟のた

めにも大変よいということで、元和五年（一六一九）に代官の許可がおり、家を作り、粟をまいて開墾生活をはじめました。そこにだんだんと粕屋（かすや）あたりより人が集まり、村ができあがりました、と書いてあります。

ところで幕府代官成瀬五左衛門は、当地と縁のない鎌倉の人湯浅清左衛門の開発許可願いをなぜ容易に認めたのでしょうか。実は当時幕府は限られた国土の中で年貢の増収を図るため、積極的な開墾政策を推進していたのです。利根川をはじめとする大規模河川の改修工事が行われ、氾濫原として放置されたままになっていた大河川下流の沖積平野が広大・肥沃な農耕地に生まれ変わり、江戸時代初期には耕地面積は前代の三倍に増大したのです。

こうした当時の開墾ブームを伝える有名な逸話が残っています。関ケ原の合戦の前、徳川家康には気掛かりなことがありました。合戦がはじまった時、家康の本拠地江戸の後方会津の大名上杉景勝が石田三成と呼応して、背後から家康を攻めてこないだろうか、という不安でした。そこでこの不安を取り除くため、家康は陸奥（むつ）の国（東北地方）の大名伊達正宗に上杉家を牽制するように依頼しました。その時、家康は百万石のお墨付きを正宗に与えたといわれます。それに感動した正宗は、上杉家と良

く戦い、家康に勝利をもたらしました。ところが、合戦後の論功行賞で正宗に与えられた恩賞は、百万石にみたないものでした。早速正宗は家康のもとに抗議に行きましたが、家康の答はあっさりしたものでした。それは「正宗に与えた領地は確かに現在は百万石にみたないが、河川を整理し開墾を行えば、百万石になる領地である。開墾に励まれよ」というものであったのです。正宗もこの家康の言葉には納得せざるを得ず、北上川を大改修し、開墾に励んだといわれています。

こうした開墾ブームの時代に湯浅清左衛門より大竹村の秣場開発許可願いが中原代官に出されたのです。代官成瀬五左衛門が幕府の方針にもかなうということで、大竹村の秣場の開墾を容易に許可したのも当然でしょう。

草分け㊟に清左衛門のほかに曽右衛門、弥兵衛（やへえ）がいたことも記されています。しかし、残念なことに、『当村草分立初覚』には神社が設けられたことは触れていません。そこで先の小野氏によって紹介された明暦二年の検地帳の町並み復元図を見ますと、『新編相模国風土記稿』に神明社と同時に建立したと書いてある神宮寺（じんぐうじ）㊟があるのです。神宮寺という名前をもつ寺は、一般に神社に所属する寺院のことで、神社の存在を前提に建てられることが多いことは歴史が示しています。つまり、「大神宮」が

あったことが推定されるのです。

さらに、この神宮寺のところを見ると、今の大神宮のあるところに「宮脇（みやわき）」と記入されています。したがって神社に関する記述は見えなくても、神宮寺の鎮守としてか、または後世のように「村持ち」㊟という公認された形式ではなくても、神明社が存在していたことがうかがわれます。歴史の考証というものは、このように様々の史料をつないで判明するなかなか面倒なものですが、ここではじめて、この土地の開墾と、鎮守㊟としての伊勢原大神宮の御創建㊟が確認されたことになるのです。

また、それから約百年後の正徳二年（一七一二）六月付けでの、神殿造立に際する棟札（むなふだ）㊟が、明治十六年に書き写されて残っていますが、それには

奉新造天照太神宮両社天下泰平

の文字が見えます。江戸中期には確実に神社は存在しており、おそらくこれは江戸初期の神社をその後立派に改修した際のものと推定されます。

やはり私たちが信じている創建の由緒の確実さが、直接ではありませんが証明されたことになるでしょう。

『愛宕山権現鐘序及銘』と『新編相模国風土記稿』に見える創建の事情

もう少し、神社の御創建(注)の裏づけになる資料をさがしてみましょう。現内宮社殿の後方に、小高い盛り土がありますが、昔はここに火伏せ(注)の神さま愛宕神社が、おまつりされていました。

このお宮は、加藤氏某という人が、伊勢原の地が火災から守られ、村民が無事に生活できるよう祈願し、享保十六年（一七三一）以前に神明社の境内(注)に勧請(注)したものです。愛宕神社には、かつて鐘楼(注)があり、その鐘の表面に伊勢原大神宮創建の最古の縁起(注)（由来）が記されていました。享保十六年に施主加藤権兵衛によって奉納されたこの鐘は、第二次世界大戦の際、武器などをつくる材料として供出されて現在はありませんが、序(注)及び銘文(注)はいまでも伝えられています。その縁起(注)に神明社創建の事情をひもといてみましょう。

相州伊勢原邑に天照大神の祠有り、故老の口碑に相伝へて曰く、昔、元和六庚申年勢州人来りて蒙茸を発き、この地を佳として新たに神明廟を祀り、以て伏臘(注)の祭を為す、其の地を名づくる所以は、蓋し故国を慕ふ也、これより以来、衆人争ひて来り鱗次して比屋張店す、歳をかさね

て遂に市廛(注)となり、毎月三八日四方の商売期せずして相集まり、往来貨易ますます昌盛を見る。

（『愛宕山権現鐘序及銘』原漢文）

さて、右によれば、享保十六年当時古老たちは、当地は元和六年に伊勢の国の人により開かれ、その人物によって神明廟（大神宮）が建立された、と口伝えしていたことがわかります。

伊勢原を開き、神明社を勧請(注)した伊勢の人とは、山田曽右衛門のことと考えられ、湯浅清左衛門の『当村草分立初覚』に見える曽右衛門と同一人物と思われます。

さて、今一つの当社創建を元和年間と伝える史料は、江戸幕府が編纂した『新編相模国風土記稿』です。記述に『愛宕山権現鐘序及銘』と同様の文言が見え、同書を参照して記されたものと思われます。それによりますと、当地はもと大竹村秣場で、元和六年に開かれたとあります。そして、このお宮については御神体(注)や祭礼日に関して、

神明社　村の鎮守なり、内外の両社、並び建り、拝殿(注)・神楽殿(注)・供所(注)等あり、内宮の神体(注)銅像、（長二寸、背に運慶十九代、大仏師田中刑部、正徳四年午五月吉日と彫れり、）外宮神体木像、（長四寸一分、背後の銘上に同、）当村開墾の頃、勧請せし所にて、伊勢の神廟に擬し、二十一年目毎に社頭修理を加へ、遷宮(注)の式あり、例祭六月十五日・六の両

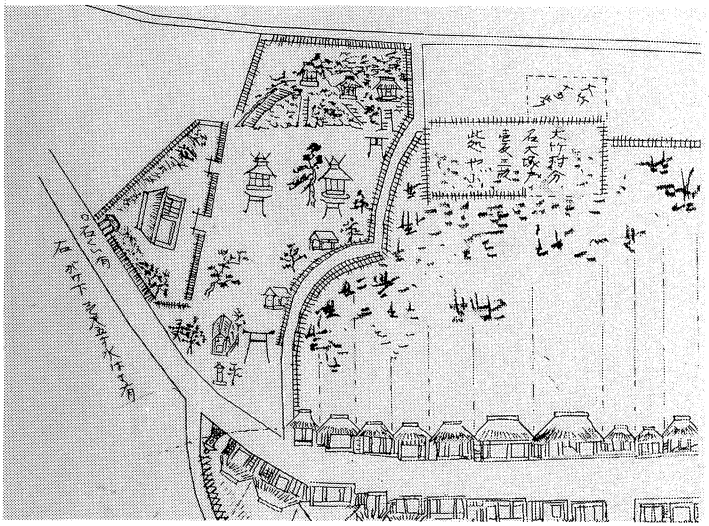
日なり、村持(注)、

と記されています。また、江戸時代の当社の管理にあたっていた神宮寺については、

社僧神宮寺、照見山と号す、普化禅宗(注)、武蔵国青梅、鈴法寺末、

本社と同時の起立にて、開祖雲晴風月、寛永十三年七月十一日卒、宗祖普化の画像を本体とす、

と見えます。この神宮寺の開祖(注)雲晴風月は、寛永十三年に亡くなっていますから、神宮寺の創建はそれ以前ということになります。したがって神宮寺という社名の由来となった神明社の創建も寛永十三年以前のことであったということになりましょう。そうすると、『愛宕山権現鐘序及銘』及び『新編相模国風土記稿』に見える当村開墾の元和年間ころ、伊勢の人（山田曽右衛門）が神明社



江戸時代後期の境内図

を創建したという語り伝えは、いよいよ信頼性が高まってくるのです。

ところで、昔から「近江泥棒に、伊勢乞食」といわれました。これは両地の人が、大変に商売がうまかったことを皮肉った言葉です。伊勢の出身者は、商人として成功する人が大変多くいました。現在の三井財閥や松坂屋も、みな伊勢商人の子孫です。しかしながら、彼らが、伊勢出身者だからといって神宮信仰を全国にひろめ、移住した所に神明社を創建(注)したという例は、あまり聞きません。つまり、伊勢出身者と神宮信仰や神明社勧請とは、ほとんど関係がないと考えたほうがよいでしょう。

たとえ、山田曽右衛門が伊勢出身者でも、ほかの伊勢原開墾にあたった人々は、鎌倉の湯浅清左衛門をはじめ相模の国（神奈川県）の人です。初代清左衛門の孫の著述であるため注意しなければならない点もありますが、『当村草分立初覚』によれば、最初にこの地に目をつけたのは、湯浅清左衛門で、伊勢の人である山田曽右衛門ではないのです。

神宮信仰とあまり縁のない鎌倉の人や大住郡（おおすみぐん）の人々が多く当地の開村に従事したとすると、神明社の創建は、伊勢出身者が当村を開き、故郷の伊勢神宮を慕ったため、という理由だけでは納得できなくなります。なぜなら鎮守のお社は、古来より、住民多数の同意のもとにおまつりされるのが普通だっ

たからです。そしてさらに、これは後の三章を読んでもらえばわかりますが、伊勢神宮の神々は、昔はほとんどが伊勢以外にまつられる例がなかったのです。それは貴い神さまで、天皇だけがおまつりされる神さま、と信じられていたことにもよりましょう。

伊勢の国から遠い相模の国の人に、新しい土地の鎮守として曽右衛門の奉祭(ほうさい)㊟してきた神明社をおまつりしたい、と思わせた真の理由は何だったのでしょうか。

元和年間、当時爆発的な伊勢踊り㊟の流行がありました。この流行により、伊勢神宮信仰がたちまち全国にひろまった歴史現象を考えてみる必要があるでしょう。

元和の伊勢踊り流行と伊勢信仰のひろがり

慶長十九年（一六一四）、徳川家と豊臣家の緊張は頂点に達しており、いつ東西が手切れとなって、戦争が起っても不思議ではありませんでした。東西両軍が戦争をすれば、史上例を見ない大軍勢が動員され、国中が戦争に巻き込まれるのはあきらかで、人々のあいだには先行きの見えない不安感が漂っ

ていたのです。『当代記』という書物や、当時の貴族及び僧侶の日記によれば、こうした緊張の中で、突然、国中に熱狂的な伊勢踊り(注)が流行したと見えます。

徳川家康が豊臣秀吉の菩提寺(注)方広寺大仏殿開眼供養(注)の延期を命じ、東西対立が決定的となった翌月八月九日、「伊勢国野上山に飛び移られる」と伊勢神宮のお告げがありました。そしてその二十八日には、「外宮の鎮座地山田にお帰りになる」とまたお告げがあったのです。人々は熱狂し、よそおいをこらして踊りながら神宮へ神宮へと向かいだしました。さらに九月になると神宮はまた、「ムクリ(注)と合戦をされる」とお告げをだされました。大風が吹き、雷鳴がとどろき、様々の奇瑞(注)があらわれ、人々はますます熱狂したのです。このころになると、伊勢の国にとどまらず、周辺の諸国まで「神宮がムクリと合戦に及ばれ、勝利された。これで太平の世の中がやってくる」というわさがひろまり、そのお礼のためにと伊勢踊りが流行し、人々は昼夜をわかたず、寝ることも食べることも忘れて乱舞したのです。壬生孝亮という下級貴族の日記によれば、

巷の説、大神宮神軍あり、勝たしめたまふのゆゑ、伊勢より踊りをはじめ、京中町々町ごとに四五十人づつ踊らしむ。

（原漢文）

とあり、九月二十日すぎには京都でも町々で大流行しはじめたということがわかります。そして山科言緒という貴族の日記によれば、二十四日には、

京中の踊り、禁中（皇居）内侍所前にておどる、その外仙洞（上皇の御所）・女院御所へ参るなり、公家ことごとく両御所へ参集、予（自分）は院参申しおわんぬ。

と見えるように、ついには皇居の中にまで伊勢踊りの人々が参入して、乱舞したのです。

この流行は翌月になってもおさまらず、徳川家康の古典師範で吉田神道(注)の大家神竜院梵舜も、大坂（当時はこう表記した）冬の陣が起る直前の十月二日の日記に、

伊勢神宮御託宣(注)により京中在々所々踊りなり、一踊り笠・鉾三つばかり、金銀花飾り衣装なかなか目を驚かす、京中貴賤ちまたに満つ、見物群集なり、遠国までかくのごときの体、希代の義申し計らふこと無し、諸社へ踊り参る、とりわけ当社（吉田神社）・祇園社・五条神明社・御霊社・豊国社・稲荷社、また氏神の社へ思ひ思ひに参る、幣(注)五本ばかり、浄衣(注)烏帽子、又は狩衣(注)・衣冠(注)の体にても出立、一踊りに三人、また巫女体にてまかりいづるもこれあり、京都奉行伊賀

守宅へ踊り参るなり、

（原漢文）

と記しています。踊りの衣装はますます派手になり、見物のため、多くの人が群がったことがうかがわれます。やがて、京都市中の有名な神社にも舞の群れはおしかけるようになり、今にも徳川の大軍に滅ぼされようとしている豊臣家の祖秀吉を御祭神(注)とする豊国社にも、徳川家康をはばかることなく人々は大勢おしよせたのです。

そして、ついには、こうした不穏な民衆の動きに鋭い目を光らせる徳川幕府の京都所司代(注)板倉伊賀守勝重の屋敷にまでも、遠慮なく踊り入るというありさまでした。

伊勢踊りは、ますます盛んになり、京都のみならず奈良・近江（滋賀県）・美濃（岐阜県）までまたたくまにひろまり、十月中には西は大坂、東は北関東にまで及びました。家康をはじめ豊臣家征伐のため大坂へと向かう全国の大名達は、伊勢踊りの群衆の中をすり抜けるようにして行軍したのです。

大坂冬の陣は、十二月二十日、大坂城三の丸の総構えの破却、二の丸の石垣・櫓・濠の埋め立てなどを条件に和解されます。しかし、それは難攻不落の大坂城を骨抜きにすることを目的としたもので、

本当の和解ではありませんでした。大戦争のきざしが消えぬ不安のためか、伊勢踊りの群舞は全国的なひろがりを見せはじめ、翌元和元年には、北は東北地方から南は四国地方まで踊りの輪は拡大したのです。

家康のお膝元駿府（静岡県）でも盛んに伊勢踊りは踊られましたが、家康をはじめ幕府の主だった人々は、この伊勢踊りを社会混乱の元凶とみなし、禁止する機会を見計らっていました。四月の大坂夏の陣の宣戦布告に先立ち、三月晦日、家康は伊勢踊りの禁を突然発令したのです。

発令の直接の理由は、『駿府記』によれば、神宮の禰宜㊟と称するものが、唐の人に頼んで花火を飛ばしてもらい、それを飛び神明㊟といつわり社会を混乱させたためとあります。禁令は、踊りを踊るものはことごとく捕らえ、牢獄につなぐという厳しいものでした。この厳しい弾圧のため、さしもの伊勢踊りの流行もようやく静まりましたが、この流行は、今まで遠い存在であった伊勢神宮の存在を、信仰の面でも地域の面でも、差別なく全国津々浦々の人々に強く印象づけることになったのです。

伊勢踊りの全国的流行には、「大坂攻め」というそれまで国民が経験したことのない全国的規模の動員体制がもたらした国民的社会不安が底流にありました。大きな社会不安が国土をおおう中で、神宮

信仰は国民の中にひろく根をおろしていったのです。

伊勢信仰のひろがりと伊勢原神明社の創建

伊勢神宮への信仰は、以上のように伊勢踊りの流行を通じてこれまでに見られない勢いで、元和年間に全国にひろまりました。その勢いは流行神といっても決していい過ぎではないものでした。ところで、日本人の中には古くから今来神㊟に対する熱心な信仰がありました。それは、新しいはやり（流行）神は、たいへん強い力をもっていると考える信仰です。元和年間に開かれた伊勢原の人々の目には、お伊勢さまはまさに強い今来の神さまと映ったのではないでしょうか。

伊勢の神さまを一般の人々が氏神さまにまつることに対しては、それまでは厳しい制約がありました。しかし、昔のように厳しい勧請㊟の禁止も、この当時にはありませんでした。「新しい村には新しい神さま」ということで、開村にたずさわった相模の国出身の人々の中にも、お伊勢さまを自然にうけ入れる空気があったものと思われます。さらに、これはあくまで推測ですが、この集落の草分けは

鎌倉の人湯浅清左衛門です。鎌倉幕府の頼朝以来の伊勢神宮に対する強い信仰を、良く見、良く知っていた可能性もありますし、ここ相州は鎌倉幕府と密接なつながりのあった土地です。様々な条件が、伊勢の神さまをお招きしやすい環境にあったとも考えられます。

このように考えると、当地とは無縁の山田曽右衛門によって勧請されたと伝えられる伊勢神宮の神さまをまつる「神明社」が相模の人々にひろくうけ入れられ、村持ち㊟の鎮守となったことも理解できると思います。

旧家加藤宗兵衛家の所蔵文書に、『伊勢原建始』というものがあります。これは寛保二年（一七四二）十一月に記されたものですが、そこに、

享保四年（一七一九）己亥（つちのとい）三月二十一日・二十二日、百ケ年之為祝ひ、鎮守ニ而大祭礼有、

と見えます。この史料によれば、伊勢踊りが全国にひろまった元和年間から約百年後の享保四年（一七一九）三月、御鎮座㊟百年祭が盛大に行われたというのです。百年大祭の行われた享保四年から百年を逆算すると、西暦一六二〇年すなわち元和六年に当社は創建㊟されたということになります。

神明社創建を語る最古の史料『愛宕山権現鐘序及銘』の元和六年に神明社をまつったという記述と

一致するのです。したがって、当社の創祀(そうし)(注)は、『新編相模国風土記稿』が伝えるように、神宮寺や大福寺の創建と同様、元和六年のことであったと考えて、おおよそ間違いないでしょう。

神仏習合(注)時代、神社の記録は、その神社を管理する寺院におかれていました。祭日や創祀の年代は、二十一年目毎に一度、遷宮式(注)を行う当社がおまつりをする上で、重要なものです。ですから、現在は伝わっていませんが、神宮寺にくわしい記録があったものと思われます。そうした記録に基づいて、享保四年に御鎮座百年大祭が行われたとすると、「元和六年創祀説」は動かせないのではないでしょうか。

このように、元和六年に創祀された神明社(注)を鎮守と仰ぐ元の大竹村の秣場の地は、やがて神明社の御祭神に由来して「伊勢原村」と呼ばれるようになりました。

それから、いかに土地の人々に大切にされてきたか、この伊勢原という地名が残り、神明社が一般には大神宮と呼ばれつづけてきた事実がそれをはっきり物語っています。

江戸時代の社殿と御神像

現在全国に一万五千社にのぼる神明社がおまつりされているといわれます。その中で、御本社伊勢神宮のように、内外両宮二殿を建立している神社は多くありません。『新編相模国風土記稿』によれば、この近辺、大住郡内には約七十社ほど神明社がありますが、当社のように二殿を構えている神社はありません。このお宮の歴史を考える上で、古くから二殿を構える構造をとっていたということは、本当に重要なことです。

古来わが国の伝統として、神社の御祭神のお名前を明らかにすることは、神さまとの隔たりをなくすたいへん失礼なこととされてきました。そこが、御本尊に対する信仰を中心とする仏教との大きな違いでした。したがって、一般の人々には、日の大神であり農業の神さまであるお伊勢さま（神宮もこのように地名でいい表す慣習が今でも残っています）が重要であって、御祭神がお二方いらっしゃり、その神さまが神宮のように、内外両宮にわかれておまつりされている、ということはあまり知られていませんでした。したがって勧請に際しても、この伊勢原大神宮のように、二宮をわけるという

ことは、あまりされなかったのです。ところが当社は、正徳二年の棟札に、すでに、

正徳二壬辰歳　勧請大覚法印覚山法主

名主　平田久兵衛

須藤勘兵衛

奉新造天照皇大御神宮両社天下泰平施主氏子、当町安全如意満足所

施主　小津清左衛門

六月吉日　社僧神宮寺空覚欽言

取次　日野屋長左衛門

山崎屋三左衛門

大工頭　山王原明王太郎

当町田中作衛門

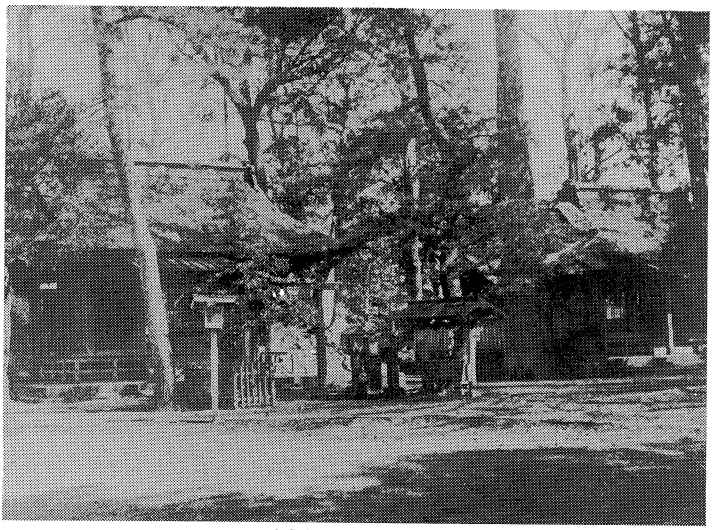
とあり、『新編相模国風土記稿』にも、

内外両社並び建り、（中略）伊勢の神廟に擬し、二十一年目毎に、社頭修理を加へ、遷宮の式あり、

と記載されているのです。

一般に神社の祭礼や建築物は、当初からの儀礼を重んじ、容易に改められることはありません。したがって、江戸時代の文献に見られる二十一年目毎の遷宮式や、両宮二つの社殿構造は、創建当初からのものと考えられます。こうした伊勢神宮にならった社殿構造や遷宮式が当社に採用されているということは、その創建に伊勢神宮のことを良く知っていた人間が関係していたことを想像させます。

当社の創建に伊勢の人がかかわっていたことを伝える現存する記録としては、愛宕神社の鍾楼の銘文の写しが一番古いものですが、社殿㊟の構造や遷宮㊟の慣例などからも、そのことは類推されるのです。社殿は、正徳の



大震災前の御社殿

建て替えの後、享和二年（一八〇二）と文化十三年（一八一六）に、火災のため二度焼失しています。そのたびに内外両宮の社殿は再建され、明治、そして大正を経て現在に至りますが、文政十二年（一八二九）再建の萱葺き屋根の社殿は、大正十二年に関東大震災で壊れてしまいました。現在の社殿は、昭和四、五年に再建されたものですが、その際にも、創建以来の伝統をふまえ、内外両宮の社殿が新築されました。

こうした創建の事情をうかがわせる当社の特異な内外両宮の社殿構造は、まことに貴重な文化財といえましょう。

ところで『新編相模国風土記稿』によれば、御社殿のほかに神楽殿㊟や供所㊟などがあったことがわかります。そのほかに今は伝わっておりませんが、内外両宮それぞれに御神像㊟がおまつりされていたといわれます。

内宮の御神像は銅製で、長さ二寸、鎌倉時代の高名な仏師運慶の十九代の子孫田中刑部というものが、正徳四年に製作いたしました。外宮の御神像は木製で、長さは四寸一分ほどのものだったそうです。今日はもう残っていないため実物を見ることはできませんが、伊勢の両神宮の御祭神を考え、当

神社に伝わる様々な話から見て、おそらくは両御神像はともに女神像であったものと思われます。

近代以降の伊勢原神明社

明治元年（一八六八）正月、王政復古㊟の大号令が出され、わが国は近代国家に生まれ変わりました。三月には神仏判然令㊟が出され、江戸時代以前のような神仏習合㊟が禁止されました。神社から仏教色が追放されることになったのです。それまでの別当㊟・社僧㊟には還俗㊟が命じられ、菩薩や権現などの仏教的神号㊟の使用が禁じられました。

実は江戸時代、仏教寺院は、徳川幕府のもとでは国の宗教として力をふるい、お役所のような仕事をしていました。具体的には戸籍の管理や諸国往来の切手の発給などを行っていたのです。したがって、権力の末端をになうものとして、しばしば住民の反発をかい、もめごとがたえませんでした。こうした下地があるところに、明治政府は神仏分離令㊟を出したのです。維新の動乱の中で、不安な民衆が法令を間違って理解し、廃仏毀釈㊟の暴挙に走ったのも無理のないことでしょう。動乱期にはこ

うしたことは、しばしば発生しますが、ひろい目で見ると、これにより歴史的に貴重な文化財を多く失ったことはまことに残念なことです。

さて、伊勢原神明社では、くわしい事情はわかりませんが、明治元年以前にすでに神宮寺が廃止され、修験（しゅげん）の大覚院の住職が、神明社神主となっています。それが知水大学善信こと宮本宣信です。明治二年は、文政十二年の本殿新築から二回目の遷宮祭の年にあたりますが、それを記念して奉納された棟札には、

表　明治二年己巳相陽大住郡伊勢原邑
　　願主　惣氏子
　奉納天照皇大御神宮　璽
　　正月二十一日　神主　知水大学源善信

裏　年番　宮世話人
　神奈川県　名主　為蔵　佐吉

支配所　組頭　吉蔵　五兵衛
同　卯兵衛　太兵衛
同　嘉左衛門　忠兵衛
百姓代　善助　市兵衛
同　太左衛門　喜兵衛

とあり、遷宮祭は知水大学によって奉仕されたことがわかります。

この大神宮にかかわっていた仏教は普化宗(注)という特別な仏教の宗派でしたが、この普化宗はのちに述べますように様々の事情があって明治四年に廃止させられてしまいます。ところが、その前に、この棟札によるかぎり、神宮寺は普化宗廃止の前にすでに神明社を退転し、修験の大覚院にその地位をゆずったものと想像されます。

どうして普化宗が追い出されたのか。一般には普化宗は、江戸時代に公儀隠密をつとめていたとうわさされていたため、明治維新当時は他の仏教諸派よりも苦境に立った、ともいわれています。幕末期に経済的にたちいかなくなっていたことも事実ですが、神宮寺の素早い行動の背景には、第五章で

触れますが、普化宗と神社のまつりに関する特別な理由があったものと思われます。

村社列格と幣帛供進社の指定

明治政府は仏教に代わる国の宗教として神道を位置づけ、明治四年官国幣社という高い社格の神社を定め、翌五年には、その他の府県郷村社の社格制度を定めました。当社は明治六年七月三十日村社に列せられ、宮本宣信は、明治八年その社掌(注)に正式に任命されました。

もともと修験の出身である宮本宣信は、神職として生きるために、神道や古典の研究に努め、神奈川県皇典講究所大山分局伊勢原支局長に就任しました。のみならず彼は、周辺の神職全体の教養の向上にも熱心だったようで、『古語拾遺』などの古典の講読や祭式の練習を目的とした講習会を、明治二十五年より神明社を会場としてはじめています。

明治三十九年、府県社以下の郷社・村社に府県や市町村より幣帛神饌料を供進する制度がはじまりましたが、明治四十四年に当社は神饌幣帛料供進神社に指定されました。名実ともに伊勢原町を代表

する神社となったのです。お祭りには町を代表して町長が祝詞を奏上し、神饌と幣帛を捧げました。町長加藤庄之助が例祭に際し奏上した祝詞を紹介しましょう。

掛けまくも畏しこき、神明社の大前に、中郡伊勢原町長加藤庄之助かしこみ、かしこみもうさく、常の例のまにまに、仕え奉る一年に一回の今日の御祭に、中郡伊勢原町より、献じ奉るうずの幣帛を安幣帛のたる幣帛と平けく安けく聞こしめして、天皇命の大朝廷をはじめて天の下の国民に至るまでいや遠に、いや広に、守り給い、幸給えと、かしこみかしこみもうす。

このように、神明社は、当時、町全体の鎮守および親神さまとしてあつく崇敬されていました。当時、一般にはこのお社は「いせのだいじんぐさま」との愛称で呼ばれていましたが、社掌のもと字総代が氏子総代（宮総代）を兼ねて神社運営に参加し、これを青年団が助け、町民一致協力して神社をおまつりしたのです。

関東大震災と神明社

大正十二年（一九二三）九月一日、大地震が関東地方をおそいました。いわゆる関東大震災です。死者は九万一千八百人、行方不明者四万二千二百五十七人、と伝えられています。伊勢原地方は震源地相模湾に近く大被害をうけました。大震災により、伊勢原でも倒壊する家、傾むく家が続出、方々に大きな地割れができました。大山では土石流が起り、多くの被害が出ました。ただ、伊勢原は、秦野や平塚のように火災は起りませんでした。最悪の事態はかろうじて避けられたといえるでしょう。しかし、この時文政十二年に造営された神明社の社殿も倒壊してしまったのです。両社殿ともつぶれはしませんでしたが倒れてしまったのです。

震災後、氏子一同はさっそく社殿新築に着手しました。この時、付近の治安を維持するため、神社の境内には戒厳部隊の兵士たちが駐留しましたが、彼らも地元の人々と協力して、倒れた社殿を引き起してくれました。しかし、立派な御社殿に直さなければならないことは誰の目にも明らかでした。それに前年に完成したばかりの境内の石玉垣なども崩れ、惨状は相当なものです。神社の関係者は、

すぐに改築改修のために立ち上りました。どの家も、地震で大きな被害をうけています。しかし神明社は、地域の精神生活の中心であったため、人々は苦しい中でも好意的に寄付に応じてくれたと、当時を知る古老橋本浩八氏は述べていらっしゃいます。しかし、復興資金は莫大なもので、当時の支出書によれば、外宮は合計四千六百五円五十三銭、内宮は合計六千百八十五円四十四銭かかったとあります。昭和二年、県に神社復旧のため神社補助金七百六十九円の下付を申請して再建準備がはじまり、内宮は昭和四年に、外宮は昭和五年に再建されましたが、外宮の再建は財政的になかなか大変だったようです。現在の価格は当時の一万倍から二万倍程といわれていますので、大体の規模は推定できると思います。それに、これまで内宮外宮はともにかや葺きだったのですが、将来のことを考えて、震災復興を機に、両宮とも銅板葺きのお屋根にあらためました。

もともと、外宮再建も内宮再建と同様昭和四年に行われる予定でしたが、おくれて昭和五年六月にようやく工事がはじまりました。しかし、前年からはじまった世界恐慌のあおりをうけ、地元伊勢原銀行が休業したため、工事資金に支障をきたしたのです。神社は県に基本財産消費認可申請を提出し、ようやく不足の千八百円をつくりだし、外宮社殿は九月に完成しました。この再建の際、神社に奉納

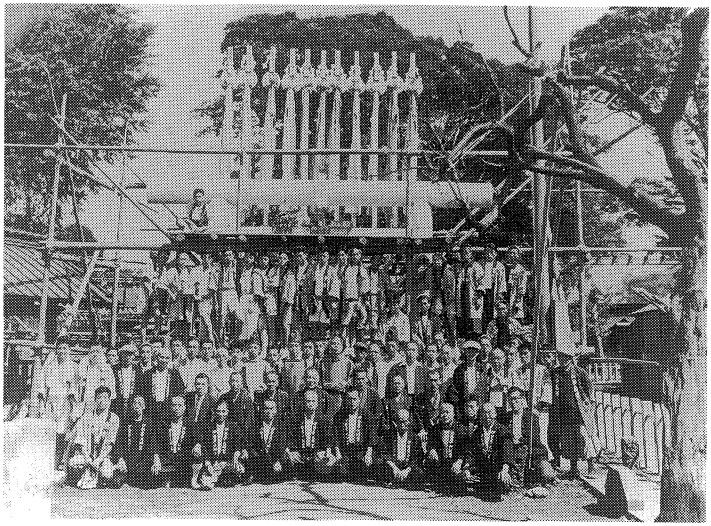
された棟札が、現在内外両宮それぞれに残っています。再建の経過や関係者などが簡単に記されていますので、左に掲げます。

内　宮

表　奉再建造営神明社内宮神殿一宇

相模国中郡伊勢原町伊勢原鎮守神明社、大正十二年九月一日正午大地震動、神殿悉倒壊矣、清宮既廃礼典有欠、故氏子一同発露敬神崇祖念、再建神殿、其輝旧儀焉、冀神明感応天下泰平・国土安穏・氏子部内康楽・風雨順序・百穀豊登矣、敬白、

裏　維時昭和四年三月吉日



昭和５年の御遷座祭

社掌

宮本豊治　伊藤葛司

氏子総代

今井慶次郎　小野田弥三郎

鳥居長治　山田忠兵衛

井上団蔵　谷亀春吉

小宮浅次郎　横山亀吉

軽部時蔵　多田兼吉

磯崎芳太郎

建築委員　大工棟梁

木村高次郎　竹井富五郎

菅沼長吉　梶山倉吉

比企野磯五郎　田中浪三

外宮

表　奉再建造営神明社外宮本殿幣殿拝殿一宇

相模国中郡伊勢原町伊勢原鎮守神明社、大正十二年九月一日正午大地震動、神殿悉倒壊矣、清宮既廃礼典有欠、故氏子一同発露敬神崇祖念、勠力協心昭和五年六月十九日起工式、同斧始祭・地鎮祭、同年七月十六日立柱祭、九月十五日神殿祭執行矣、再建本殿・幣殿・拝殿、輝其旧儀焉、冀神明垂感応、天下泰平・国土安穏・氏子部内康楽・風雨順序・百穀豊登矣、敬白、

裏　維時昭和五年九月吉日

社掌

宮本豊治

氏子総代

井上団蔵　比企野磯五郎

今井慶次郎　加藤宗兵衛
鳥居長治　横山亀吉
多田兼吉　山田忠兵衛
軽部時蔵　菅沼長吉
木村高次郎

復興委員　大工棟梁
小野田弥三郎　梶山倉之助
伊藤七右衛門　梶山栄雄
同福蔵
田中浪造
吉川房五郎

この昭和四、五年に再建された社殿が、現在の社殿です。内外両宮ともに坪数・構造は同様です。本殿は伊勢

戦前のおまつりスナップ①

神宮の社殿と同系統の神明造り(注)で、間口は一間三尺、奥行きは一間五尺六寸です。幣殿(へいでん)(注)は切妻造り(注)で、間口は一間三尺、奥行きは一間五尺五寸です。拝殿は本殿と同様神明造りで、間口三間二尺、奥行きは二間あり、本殿・幣殿より大きめに作られています。

昭和の時代

ようやく震災復旧をした神社は、以前にも増して住民たちの信仰をあつめることになりました。大正、昭和の時代には、祭りがあると、小学生たちがそろって校旗を先頭に神社に参拝し、終ったあとに休みになり、そろって祭りに参加する風景が見られました。またどこの家で

戦前のおまつりスナップ②

も、大きな祭り提灯を家先にかかげ、その提灯には各家手づくりの造花が美しくかざられていました。青年団の人々は、提灯番といって、当時はロウソクで明りをとっていましたから、危険がないように終夜パトロールをして神社の氏子区域をまわりました。神社の祭りの出しものの相撲大会など、地元伊勢原ばかりではなく平塚や大磯、秦野など、多くの周辺土地の人々も見物にやってきて、知りあいの氏子の家々に泊まっていったり、祭りの期間はそれこそ、街中はにぎやかな声が夜通しこだまするようなありさまでした。

しかし、そのような中にも、時代が支那事変のはじまるころから、雰囲気は少し違ったものになってきました。いままで通りの人々の信仰はあります。しかし、のどかな祭りの雰囲気が、何となく固苦しさを感ずるような時代を迎えたのです。役所などから、お宮のことを、馴れ親しんだ「大神宮さん」「伊勢原の伊勢の大神宮さん」と呼ぶことは好ましくないなどと指示されたり、出征兵士が次々に武運長久を神社に祈り、出征をしていく風景が見られるようになりました。祭りは残った人々で精いっぱいにつづけていましたが、やがて本土が空襲をうけるようになり、昭和二十年には終戦の日を迎えることになりました。

神明社から伊勢原大神宮へ

―社名の変更―

昭和二十年十二月十五日、第二次世界大戦に無条件降伏したわが国に対し、日本占領連合国軍最高司令官総司令部は、「国家神道・神社神道ニ対スル政府ノ保証・支援・保全・監督及弘布ノ廃止ニ関スル件」との標題を持つ覚書を送ってきました。この覚書を一般に神道指令といいます。この指令により神社の国家管理は禁止され、翌二十一年二月、全国の神社を管轄していた神祇院および神社に関する公的機関は廃止されました。神社は宗教法人法令による宗教法人となったのです。

新しい制度への移行にあたって、全国の神社を一つにまとめる神社本庁(注)が生まれました。当神明社も神社本庁設立の段階で本庁に所属し、宗教法人として再出発したのです。古老の話によると、当時の七代目総代加藤宗兵衛氏はGHQの神道指令に機敏に対応し、それまでは兼帯であった氏子総代(宮世話人)と字総代(町内会のような役割をしていた)をいちはやく分離したといわれています。軍や役所が戦争とともに神社にも様々な指令をしたのを見て、役所の行政の担当である字総代と、お宮

を中心に活動していた総代を分離したのです。おそかれはやかれGHQから指令される政教分離を強制される前に自ら混乱のないように手を打ったというのは、なかなか興味深い話です。

こうした先見の明のある総代さんたちの努力の結果、大きな混乱もなく神明社は、神社にとって厳しい戦後を乗り切りました。

神社は戦後の時代も、地元の固い信仰に支えられて、いくつかの神社で聞くような厳しい事態を迎えることはなく、祭りを続けてきました。終戦直後は物も少なく不自由の多い祭りでしたが、時代が回復するに従って、神社は住民とともに勢いをとりもどしていきました。昭和四十七年には内宮拝殿改築を主とした遷宮祭が古式にのっとり厳粛に行われ、社頭は戦後もますます繁栄しました。しかし、氏子一同には心残りな問題がありました。それは神社の名前の問題です。

伊勢原神明社は「大神宮」という通称が有名過ぎて、正式名を神明社ということを知っている人はあまりいません。古い氏子の方はもちろん、神道のことを良く知っているはずの大山の関係者に聞いても、神明社のことをだいたいの方が伊勢原大神宮といいます。それにもかかわらず、伊勢原大神宮の正式な名前は神明社だったのです。戦前の役所も「伊勢原大神宮」と称することを禁止しましたし、

戦後になっても、皆は「大神宮さん」と自然に呼んでいたのですが、「伊勢原大神宮」との標柱をたてたら、今度は神社本庁から「それは好ましくない」などといわれます。それが土地の関係者には不満でなりませんでした。

なぜ、「大神宮」とひろく人々に呼ばれながら、伊勢原の神明社は大神宮と称さなかったのでしょうか。それは近代以前、大神宮という社名は、伊勢大神宮に限られていたためです。昔は天照皇大御神(アマテラスオオカミ)をおまつりしているからといって、伊勢の神宮以外の神社が大神宮の社名を称することはできなかったのです。しかしそうした制度のなくなった戦後になっても、当社が大神宮の社名を称せないことは、神社本庁が引きついだ神社界の方針だといっても当地の氏子にとっては残念でたまりませんでした。なんとか神社本庁に認めてもらい、正式に大神宮の社名を称せないものかと、いろいろと思いをめぐらしたのです。

この社名変更の請願運動がにわかに具体化するのは、昭和五十八年に就任した宅野正儀宮司のもとでした。

昭和六十一年二月二十五日に開かれた神社の役員会議の席上、社名変更について、会議の記録によ

れば次のように討議されました。

山田亀雄氏　伊勢原駅（小田急線）前で「神明社はどちらですか」と尋ねると、商店・タクシーの運転士・土地乗降客のほとんどが「知りません」と答え、「大神宮さんは」と聞くとすぐ教えてくれます。平塚駅（東海道線）でタクシーを拾い、「伊勢原神明社へ願います」といえば必ず「わかりません」と答え、「大神宮さんだよ」といえば「はい」の返事で目的地へ着きます。創祀より伊勢原大神宮で今日にいたっており、氏子ですら神明社と聞くと、知らないよその神社のような感じをもちます。この際かがやかしい伝統と歴史にふさわしい社名をもって臨むのが、自然至当ではないか、というのが提案の主旨であります。

田中茂夫氏　吾々の祖先が元和五年にこの地に住み伊勢原を開き、伊勢の大神宮さまを鎮守としておまつりしてより、伊勢原大神宮の呼称で今日にいたっております。伊勢原大神宮と社名を変更することに大賛成です。

議　長　神明社を伊勢原大神宮と改称することに御意義ありませんか。

全　員　意義無し。

議　長　総代の皆さんいかがですか。

全　員　意義無し。大賛成。

議　長　それでは早速そのように手続きをとります。本日の会議はこれをもって閉会いたします。

この時の役員会の参加者は、宮司宅野正儀・責任役員総代山田亀雄・同田中茂夫・総代大久保幸雄・同今井虎男・同長島一夫の各氏でありましたが、右のように全員一致で社名変更が可決されたのです。同年三月一日、神社本庁統理徳川宗敬宛に神社名変更のための「規則変更承認申請書」が提出され、宮司は神奈川県神社庁(注)を通して、これまでのいきさつ、氏子たちの熱望を理解してもらうことに力を入れました。その結果、この希望は同年四月二十五日、ついに神社本庁より承認されることになりました。本庁の承認をうけて五月一日に県に規則変更が申請され、七月二十六日神奈川県知事より認証されました。ここに、通称大神宮こと伊勢原神明社は、正式に「伊勢原大神宮」となったのです。神明社から大神宮への社名の変更は、御鎮座からじつに三百六十六年たってからでした。

今、私たちはこの神社をごくあたりまえに「伊勢原大神宮」といいます。それはこのお宮が創建された当時から、一般にそのように呼ばれていたからでしょう。この土地が「伊勢原」といわれて長い歴史を歩んできたことを見ても、この神社が一般に「神明社」というより「お伊勢さま」とか「伊勢原大神宮」といった愛称で呼ばれていたことは推測されます。しかし、行政制度上の呼ばれ方は「神明社」とされてきたことは、ほとんどの人が知りません。

名称の変更は当神社の場合、もともと一般の人が用いない呼び名がついていたのを、人々の呼びならわしたものにと変更をしたもので、一般に全国の神社のする社名の変更とは、少し性格が違うものであったということができるでしょう。

第二章　御祭神

神々の生いたち

これまではどんな事情で伊勢原という土地が生まれ、そこに大神宮が創建されたのかを史料を中心に追ってきました。その中で、伊勢原大神宮にまつられる御祭神は、伊勢神宮の内宮と外宮にまつられるもっとも貴い神さまであることを述べました。

神社を良く知り、神社に対する信仰を深めていくためには、そこにまつられている神々のことを良く知るのも大切なことでしょう。そのようなことからここでは、内宮にまつられる天照皇大御神（アマテラススメオオミカミ）と外宮にまつられる豊受姫大神（トヨウケヒメオオカミ）について触れて

みたいと思います。記述はわが国最古の古典である『古事記』や『日本書紀』に基づいて、神々の御誕生から、やがてこの日本の国に神々が降りてこられるまでの神話の世界、つづいて日本を治められた天皇を中心に、日本人がおまつりする神社ができる中に、どのようにして伊勢神宮が伊勢の地につくられたかという古代史の時代にわたります。

そのお話をする前に一つだけ知っておきたいことがあります。それは現在の学校の歴史教育では「神話は現実の話ではない。科学的に見れば、人間はゾウリムシのような動物から、だんだんと発展して類人猿になって現代人になったのだ」ということのみを教えます。考古学者にもそのような面ばかりを教えて神々のことを、また私たちが神々の子孫であると信ずることを否定する傾向があります。

私たちも、この動物発展の歴史を否定するわけではありません。しかし、人間の歴史は物理的な身体の発展史だけではありません。動物が類人猿から現代人へと発展して、独自の文化を築くようになってからたどってきた、どのように人々は考えながら生きてきたかという精神史は、また別の分野で、また人間の社会を知るうえでより大切な歴史なのです。神話は世界中のどこにでもありますが、その人々が生き育ち文化をつくりあげてきた基礎になる、心の歴史なのです。しかも神話は後につづく人々

が生きるための人生観、価値観、信仰観に大きな影響を与えてきました。レントゲンで遺跡や土器を調べても、土を掘っても出てこない心の歴史をもっと大切にする必要があると思います。それなくして現代の文化そのものを語れるわけがありません。そんな思いから、しばらく大神宮の神さまを中心にした、古代から現代まで人々が語りつづけてきた神話のメルヘンの世界をながめてみたいと思います。

内宮

天照皇大御神

伊勢原大神宮の内宮におまつりしている神さまは天照皇大御神（アマテラスオオミカミ）と申しあげます。『古事記』や『日本書紀』によれば、アマテラスオオミカミはイザナギノミコトとイザナミノミコトの二人の神さまが国生み（国土をつくること、つまりお二人の神さまが日本をお生みになったと記されています）をされた後、お生みになったお子神さまで、もっとも貴い日の神さまと記されて

います。

神話には、まず神さまによって国土が作られ、その国土をすみからすみまで太陽の光のように照らしてお見守りになる中心として、アマテラスオオミカミがお生まれになり、様々の神さまとともに御活躍になるというまことに整然とした日本の起源が記されています。そして後に触れますように、そのアマテラスオオミカミの命令をうけてこの日本という国土でまつりをなさるのが歴代の天皇と、一筋の乱れもなくまとめられています。さてアマテラスオオミカミは日の神さまと申しあげるように、人々の（そして自然すべての）生活の上で、もっとも重要な太陽を象徴される神さまで、現在の皇室の御祖先神であるのと同時に、日本国民すべての親神さまともされています。

日本の神話では神々は天の上の高い特別の世界、高天原（たかまのはら）㊟に住んでおられますが、そこでも最高の神さまとして、他の神さまをおまとめになっておられます。この地上の日本では、古くはアマテラスオオミカミの神社はなく、直接天皇が代々おそばにおまつりになっておられましたが、その後特別の神宮を建てられ、やがて伊勢の地におまつりされるようになりました。また伊勢にお宮を作られた後も、皇居には天皇のまつられる神殿がありました。やがて時代が下ると全国の大神宮や神明さまにも

まつられるようになりました。しかも私たちは毎年この伊勢のお札をおうけして、神棚にまつっています。もっとも知られた神さまだということができるでしょう。

天照皇大御神のご誕生

それでは、神話によってアマテラスオオミカミのことをたどってみましょう。『古事記』や『日本書紀』は、前にお話したように、イザナギノミコトとイザナミノミコトが国土や諸神を生み終えた後、「天下の主」としてアマテラスオオミカミをお生みになったという説を伝えていますが、このほかにも、イザナギノミコトが、国生みの後亡くなられた最愛の妻イザナミノミコトが住まわれる黄泉（よみ）の国㊟から帰られ、阿波岐原（あはぎはら）でミソギ・ハライ㊟をなさった時、左眼から誕生されたという説。そして、イザナギノミコトが貴い神を生もうとおっしゃり、白銅鏡をもたれた時に誕生されたという説などイザナギノミコトのお子神さまですが、お生まれになったいきさつについては他におおよそ二つの説もあります。

ところで、アマテラスオオミカミには大変親しいお二人の弟神がいらっしゃいました。それは、夜の世界を治められるツキヨミノミコト（月読命）と海上を治められるスサノオノミコト（素戔嗚尊・須佐之男命）です。このお二人のミコトは、アマテラスオオミカミとともに誕生され、アマテラスオオミカミにつぐ貴い神さまといわれています。

アマテラスオオミカミとスサノオノミコト

アマテラスオオミカミとツキヨミノミコトは、父神イザナギノミコトの命令に従い、それぞれが治められるべき高天原や夜の世界に向かわれましたが、スサノオノミコトだけは父神の命令に従わず、長いひげが胸にたれさがる年になっても、ただ泣きわめいてばかりおられました。スサノオノミコトは大変に力の強いたくましい神さまです。その神さまが泣かれるのですから、泣きわめくありさまはすさまじく、青い山が枯れ山になるまで泣き枯らし、海や川は泣く勢いでかわいてしまったほどだったといいます。青い山も枯れ、水もなくなってしまった地上には、悪い神がはびこり、あらゆるわざ

わいが起りました。そうしたありさまを心配された父イザナギノミコトは「スサノオノミコトよ。おまえはどうして父の命じた海上の国を治めに行かないで、泣いてばかりいるのだ」とたずねられましたが、スサノオノミコトは父神の問いに、「お父さま、私はお母さまのおいでになる黄泉の国に行きたいと思い泣いているのです。どうか、私を黄泉の国に行かせてください」と答えられました。

しかし、黄泉の国とは死後の世界のことです、スサノオノミコトにはとうてい行かれないところです。亡き母を慕う気持ちはわかりますが、死後の世界に行きたいといって泣き叫ぶ大人になったスサノオノミコトを、父イザナギノミコトはお許しになりませんでした。いくら「あきらめろ」と命じても泣きやまないスサノオノミコトに、イザナギノミコトは大変お怒りになり「そのようなわがままをいうおまえを、この国においておくわけにはいかない」とおっしゃり、スサノオノミコトを追い払われてしまいました。

父神から国を追われてしまったスサノオノミコトは、大変困りましたが、「それならお姉さまのアマテラスオオミカミにたのんで黄泉の国に行かせてもらおう」とお考えになり、アマテラスオオミカミの治めておられる高天原へと向かわれました。乱暴者のミコトが天におのぼりになる時、その勢いに

山や川がことごとくなり響きました。この騒ぎに驚かれたアマテラスオオミカミは「スサノオが天にのぼってくるのは、立派な心でのぼってくるのではない。高天原を奪おうと思ってのことに違いない」とお考えになり、刀や弓矢をとって待ちうけられました。

ものすごい勢いで高天原にのぼってくるスサノオノミコトに、アマテラスオオミカミは、「あなたは、父君イザナギノミコトの命令により海上を治めに行ったのではありませんか。なぜいまごろ天上の国高天原にのぼってくるのですか」と問いつめられました。スサノオノミコトは、姉上の厳しいおたずねに「私には悪い心はありません。父君がなぜ泣いているのかとおたずねになりましたので、『母上の住んでいらっしゃる黄泉の国に行きたいと思い泣いているのです』とお答えしたところ、父上は大変お怒りになり、追放されてしまったのです。母上のおられる黄泉の国に行く前に姉上にお別れを申しあげようとここにきたのです。私にはこの世界をうばおうなどという心はありません」と答えました。

しかし、アマテラスオオミカミは、乱暴者の弟の言葉をすぐには信用できませんでした。そこで、「それなら、あなたが正しい心であることを私に何かでわからせて下さい」とおっしゃいました。スサノオノミコトは「それならば、姉上のもち物と私のもち物を交換して、子供を産みましょう。もし、

みごとに子供が誕生すれば、私の心がけがれていない証拠になります」と答えました。

天の河のほとりに二人の神さまは立たれ、アマテラスオオミカミはスサノオノミコトの長い剣をうけ、それを打ち折り、天の真名井(注)の水をそそいでかみにかんで息を吹かれました。そして、その息の霧の中から三人の女神がお生まれになりました。一方、スサノオノミコトはアマテラスオオミカミの勾玉の緒をいただき天の真名井の水をそそいでかみにかんで息を吹き、そこから五人の男神をお生みになりました。

お子神が無事誕生された後、スサノオノミコトはアマテラスオオミカミに「私の心が清らかだったので、生まれた子供が男神だったのです。私は、姉上の疑いをはらせたのと同時に、疑いをかけられた姉上に勝ったのです」といいました。

このようにして高天原に住むことを許されたミコトですが、しばらくたつとミコトの心の中に、生まれつきのいたずら心がむくむくと頭をもたげてきました。そして、また乱暴を働くようになったのです。

アマテラスオオミカミは、秋に祖先の神さまをおまつりするため、神聖な田を耕していらっしゃい

ましたが、こともあろうにその神聖な田の畦(あぜ)や溝をスサノオノミコトはこわしたり、うめたりして、耕せないようにしてしまったのです。けれどもそうしたスサノオノミコトのふるまいを見られても、アマテラスオオミカミは決してお怒りにはならず、「田の畦をこわし溝をうめたのは、地面を惜しまれたのでしょう」と、良い方に理解されるのにつとめられました。しかし、スサノオノミコトの悪い行いはなおるどころか日ごとにますますひどくなるばかりでした。

天の岩戸隠れ

アマテラスオオミカミは、清らかな機織り場で、秋のお祭りの時に神さまに着ていただく衣服を機織り女に織らせていらっしゃいました。スサノオノミコトは、この機屋を汚してやれと考え、機織り場の屋根に穴をあけて、班駒(ふちこま)㊟の皮をむき投げこんだのです。皮をむかれた班駒が落ちてきたことに驚いた機織り女は、驚きのあまりに死んでしまいました。これには慈愛深いアマテラスオオミカミも大変お怒りになり、ついに天の岩戸㊟の中に姿を隠されてしまったのです。

天の岩戸にアマテラスオオミカミが姿をお隠しになると、高天原も下界も真っ暗な暗闇につつまれてしまいました。永久に夜がつづくことになったのです。そうすると、暗闇に乗じて、あらゆるわざわいが起こり、悪い神がはびこるようになってしまいました。

こうした事態に困りはてた神々は、何とかアマテラスオオミカミに、昔のようにお出まし願いたいと思い、天の安河に集い、その方法を考えました。タカミムスヒノカミの息子で知恵の神のオモイカネノカミに、いろいろ考えさせ、計画はできあがりました。まず長鳴き鳥を鳴かせました。つぎに勾玉（まがたま）や鏡をつくり、天の岩戸の前で、お祭りをする準備をしました。アマノコヤネノミコトが荘重な祝詞（のりと）を申し上げ、力持ちのアマノタヂカラオノミコトが天の岩戸の陰に隠れると、岩戸の前でアマノウヅメノミコトという芸能をつかさどる神が、楽しい踊りを踊りはじめました。その踊りは大層おもしろかったそうで、たくさんの神々は大いに喜びました。

そうした様子を岩戸の中で聞いていらっしゃったアマテラスオオミカミは、不思議に思い、岩戸を細めに開けて、中から「私が隠れているので、天の世界も下界もみな暗くて困っているだろうと思うのに、どうしてアマノウヅメノミコトは踊りを舞い、多くの神々は笑っているのでしょう」とおっしゃ

いました。そこでアマノウヅメノミコトは、「あなたさまにまさって貴い神さまがおいでになりますので、楽しく遊んでおります」と申しました。しかし、アマテラスオオミカミより貴い神さまがいらっしゃるわけがありません。どうしたことだろうとオオミカミがそっと見られると、アマノコヤネノミコトとフトダマノミコトはかねて用意をしておいた鏡をさっと差し出しました。

アマテラスオオミカミは、鏡に映ったご自身の姿をアマノウヅメノミコトがいう貴い神さまと間違われ、どんな方だろうと岩戸から少し姿を出されました。その一瞬のすきを突き、力持ちのアマノタヂカラオノミコトがオオミカミの手をとって、岩戸から引き出し申しあげました。一方フトダマノミコトは、間をおかず岩戸の前に注連縄（しめなわ）をはり、「これから内にはお帰りなさいますな」と申しあげました。

こうしてオモイカネノカミの計画を高天原の神々の協力で行い、アマテラスオオミカミは、再び高天原にお出ましになり、天上にも下界にも日の光が戻り、悪い神はいなくなりました。

しかしスサノオノミコトは、アマテラスオオミカミに無礼をはたらき、オオミカミが天の岩戸に隠れられるもととなった罪を問われ、たくさんの神々の話し合いのもと高天原から追放されてしまいま

した。

ニニギノミコトの天孫降臨(注)と宮中でのアマテラスオオミカミの奉祭

時が過ぎ、アマテラスオオミカミは、タカミムスヒノミコトとご相談になり、地上の国をご自身のお子さまであるアマノオシホミミノミコトに治めさせようと考えられました。そしてそのことをオシホミミノミコトにお伝えになると、ミコトは「私が高天原から地上の国へ降りようと準備をしておりますと、子供が生まれました。名をニニギノミコトと申します。私よりこの子を地上にくだされた方が良いのではないでしょうか」とオオミカミに申しあげました。そこで、アマテラスオオミカミは、オシホミミノミコトの意見を採用され、孫にあたるニニギノミコトを地上にくだすことになさいました。

ニニギノミコトが地上に降りようとなさった時、アマテラスオオミカミは、食物の中でもっとも大切な稲と八咫御鏡(注)をニニギノミコトにお授けになり、「この鏡を私の御魂と思い、地上でおまつり

し、稲をつくって生活しなさい」とおっしゃいました。ニニギノミコトは祖母のアマテラスオオミカミの教えのとおり、八咫御鏡を捧げもって筑紫（九州）の高千穂に降りられ、政治を行われるに先立ち、お住いで丁重にいただいた鏡をおまつりされました。

神武天皇の御東遷（とうせん）とアマテラスオオミカミ

このニニギノミコトの曾孫にあたるのが、はじめて天皇の位につかれたカムヤマトイワレビコノミコトつまり神武天皇です。

カムヤマトイワレビコノミコトは、当時葦原中国（あしはらのなかつくに）といわれた日本をもっと豊かにしようとお考えになり、大勢の人々とともに海路東に向かって旅立たれました。そしてようやく河内国（大阪府）に到着されましたが、そこにはナガスネヒコというその土地の豪族がおり、ミコトの前途をさまたげました。そこでミコトは熊野（和歌山県）方面から大和（奈良県）に入り、ナガスネヒコを討伐し、畝傍山のふもとの橿原の地に御殿を建てられ、初代の天皇となられました。

『古語拾遺』という書物には、この時の様子について、

この時にあたりて、帝と神と、其の際未だ遠からず。殿を同じくし床を共にす。此を以て常と為す。

と見えます。アマテラスオオミカミの霊のやどられる八咫御鏡を御神体として、神武天皇は同じ御殿の中に丁重におまつりされていたことがわかります。

これ以後、アマテラスオオミカミは、皇居の中で代々の天皇によりおまつりされてきましたが、十代崇神天皇の時代に皇居の外に格別な神宮としてまつられることになりました。

崇神天皇の御敬神と笠縫邑（かさぬいむら）への遷座（せんざ）

この天皇は、歴代の中でも、大和国家の基礎をつくられた天皇として名前の知られた方です。四道将軍を派遣して、国域をひろげ、当時大きな勢力を誇っていた出雲を平定したことは有名です。しかし天皇が有名なのは、そうした政治的なことばかりではありません。神さまをあつく敬い、天社（あまつやしろ）・

国社（くにつやしろ）の制度㊟や、神地（かむどこ）・神戸（かんべ）㊟を定められたことでも有名です。

神さまを大事にし、何事につけ神事㊟を優先させられた天皇でしたが、即位後五、六年のころ、疫病がはやり、そうした社会不安が多かったせいか、国内では反乱事件が続発しました。

天皇は、こうした事態を大変憂慮され、以前にもまして神さまを敬い、国が平和になるように日夜祈願されました。天皇は神さまの中でも貴いアマテラスオオミカミをご自分と同じ建て物の中でおまつりすることは、大変失礼なこととお考えになり、皇女トヨスキイリヒメに命じて倭（やまと）の笠縫邑に社をつくりまつらせることにされました。ここに、長い間天皇とご一緒の御殿でおまつりされていたアマテラスオオミカミが、皇居の外においでになり、オオミカミのための社殿がはじめて建てられたのです。

伊勢御鎮座

笠縫邑でおまつりされていたアマテラスオオミカミが、さらに伊勢の国へお移りになるのは、崇神

天皇のお子さま垂仁天皇の時代のことです。西暦でいいますと、三世紀頃のことと考えられています。

垂仁天皇は、その二十五年、父崇神天皇の神々を敬（うやま）われた政治をたたえ、ご自身も父君にならい、神々を敬われることを誓うお詞を国民にくだされました。そして、アマテラスオオミカミをそれまでおまつりしてお世話してこられた叔母のトヨスキイリヒメの役目を解かれ、ご自身の皇女ヤマトヒメにアマテラスオオミカミのもっとも好まれる場所におまつりさせることになさいました。

ヤマトヒメはオオミカミをいただき、御鎮座㊟されるにもっともふさわしい場所を求めて、旅立たれました。大和（奈良県）の菟田から、近江（滋賀県）に入り、美濃国（岐阜県）を経て伊勢の国に至られました。その時アマテラスオオミカミは、ヤマトヒメに、

是の神風の伊勢の国は、常世の波しき波よする国なり。かたくにのうまし国なり。是の国に居らむとおもふ。

（『日本書紀』）

現代訳しますと「伊勢というところはひたひたと波がうちよせる国だ。しかもさいはてのすばらしいところだ。ここにとどまろう」と訳したらよいでしょう。そうおっしゃって、伊勢の国鎮座を望まれ

たのです。ヤマトヒメは、さっそくオオミカミの教えに従い社殿をつくり、オオミカミは以後長く伊勢の地に鎮座されることになったのです。

外宮

豊受姫大神

トヨウケヒメオオカミは、保食神(うけもち)(注)・農業の神・養蚕の神として古来名高い神さまです。伊勢神宮では、アマテラスオオミカミの食膳をつかさどられるミケツ神(注)として、外宮に鎮座していらっしゃいます。

『古事記』によれば、トヨウケヒメオオカミは、ニニギノミコトが高天原より高千穂の峰にお降りになった時、アマテラスオオミカミの命令で、ニニギノミコトのお供をして地上にくだられたとあります。その後、平安時代初期に成立した『止由気宮儀式帳』という書物によれば、五世紀頃まで丹波の国（京都府北部および兵庫県北部）の比治真奈井原に鎮座されていました。

アマテラスオオミカミに呼ばれて

雄略天皇の時代、ある晩天皇の夢枕にアマテラスオオミカミがお立ちになり、

私は、高天原にいたころから大変気にいっていた伊勢の地に現在住んでいます。しかし私一人で住んでいるため大変さびしく思っています。その上朝夕の食事にも事欠くありさまです。丹波の国の比治の真奈井に住んでいらっしゃる食膳をつかさどる御饌都神（みけつ）トヨウケヒメオオカミを、私のもとにつかわしてください。

とおっしゃいました。このオオミカミのお言葉に驚かれた天皇は、さっそくトヨウケヒメオオカミを伊勢の地にお移し申しあげ、トヨウケヒメオオカミを伊勢におまつりして、アマテラスオオミカミの食膳をつかさどっていただくことにしました。以後、トヨウケヒメオオカミは、外宮にある御饌殿（みけでん）㊟で、アマテラスオオミカミのため、日ごと朝夕の大御饌（おおみけ）㊟を今日まで奉りつづけておられるのです。

こうした食物や、農業を特につかさどられる御神格から後世トヨウケヒメオオカミは、ひろく農業に従事する人々からあつく信仰されました。

第三章　伊勢神宮と神宮信仰

伊勢神宮の性格

さて、これまで伊勢原大神宮の御祭神について見てきましたが、このお宮の神さまの貴さと、全国の人々にどれだけ信仰されている神さまであるのかを知っていただくためにも、伊勢神宮と神宮信仰の歴史について少々お話しましょう。

今日、全国に多数のアマテラスオオミカミをおまつりしている神社がありますが、昔は前にも述べましたように、天皇が直接おまつりになった伊勢の神宮だけでした。ですから神宮といえば、伊勢神宮のみを指していました。神宮は天皇や皇室の方々だけにおまつりすることが許されていた格別の神

社だったのです。こういいますと、何か非常に閉鎖的で、庶民には関係のない神社であるかのように思われますが、本来の神社の性格を考えると、そうとはいえません。

古代氏族（しぞく）と氏神（うじがみ）

天皇や貴族をはじめ一般庶民に至るまで、昔は氏族㊟ごとに氏神をおまつりしていました。古代氏族として有名な物部氏は石上神宮を、藤原氏は春日大社を氏神としておまつりしていました。今日では石上神宮や春日大社に、物部氏や藤原氏でない人がおまいりしても、誰もとがめられません。しかし、昔は関係のない他の氏族のものがおまいりしたり、お祭りに出かけることは許されなかったのです。

神祭でいかに氏族が重んぜられたか、一つの例を紹介しましょう。藤原氏は、多数の皇后を出し、皇室の外戚家（がいせきけ）㊟としては有名です。ですから、春日大社のお祭り春日祭には、天皇よりおつかいがつかわされることになっていました。その際、藤原氏以外の氏族がおつかいに立つ時は、神社の中に入

る門が、藤原氏が使用する門とは異なっていたのです。このように神社のお祭りの時には、たとえ天皇のおつかいでも、神社関係の氏族かどうかが、厳しく問われました。一事が万事で、どんな小さな氏族でも、氏神さまは、その関係氏族のものしかお祭りにたずさわることができなかったのです。古代の神社は、今のように誰にでも開かれていたわけではなかったのです。

伊勢神宮は、神武天皇・崇神天皇・垂仁天皇のところでもお話したように、皇室の氏神です。したがって、古くは天皇や皇室の方々のみしかおまつりできなかったのも、氏神という視点から見れば、何も不思議なことではないのです。

伊勢遷座とその意味

皇室の祖先神であった神宮は、垂仁天皇の時代に伊勢の地に移られます。なぜ伊勢の国が御鎮座の地に選ばれたのかというと、大神さまが望まれたと古い書物にはありますが、合理的に考えると、大和の国から見て、日神にもっともふさわしい太陽がのぼる東の国であったからだとも考えられます。

実際、崇神・垂仁両天皇の都のあった磯城・纏向の地から東を見ると、大和最大の霊峰三輪山があり、そのまた東の延長線上に伊勢の地があるのです。

ところで、神宮が伊勢に遷座された背景には、もう一つ重要な事実が隠されていると思います。だんだん統治の範囲をひろげてきた皇室とともに、その氏神という地位から、伊勢地方までを勢力下におく皇室によって統治された大和朝廷の大神と大きく発展された事実です。くわしくは次の章で述べますが、御遷座はアマテラスオオミカミが、大きく育った大和朝廷の統治者である天皇が代表しておまつりする神さまとなったことを示しているといえるでしょう。

律令国家とアマテラスオオミカミ

さて、時代はくだり、七世紀後半、中国大陸に隋・唐などの強力な中央集権国家が出現します。両国の成立は、朝鮮半島や日本にも大きな影響をおよぼしました。わが国はそれまで皇室（大和朝廷）を中心にゆるやかに結束する多くの氏族の連合国家でした。しかし、唐の援助のもと朝鮮半島では新羅

が勢力を伸ばし、わが国と友好関係にあった百済（くだら）や高句麗（こうくり）を圧迫するようになりました。

こうした厳しい大陸の情勢に対応するため、わが国も中央集権体制を早期に確立しなければならなかったのです。隋・唐両国は、律令という法律に基づき、公地公民（こうちこうみん）制㊟を基礎としてなりたっており、一般に律令国家といわれます。この国家制度は、国が直接国民をつかんでいるので、氏族連合国家とは比べものにならない強力なものであったのです。

この律令制は日本にもとりいれられました。当然律令国家の成立にともない天皇は、律令国家の統治者になりました。そして、その天皇がおまつりする伊勢神宮（アマテラスオオミカミ）も天皇の地位の変化にともない、皇室の氏神から律令国家の守護神へとその性格を変えられたのです。古くは、アマテラスオオミカミは、皇室の方々の氏神でしたが、律令国家の統治者天皇のみがおまつりできる存在となられたのです。以後、皇后や皇太子でも天皇のお許しなしに、神宮に祈願することはできなくなりました。

伊勢神宮のお祭りと朝廷のお祭り

さて神宮の年間のお祭りは、大変多くありました。中でも基本となるのは、中央朝廷で天皇が行われる六月・十二月の神今食（じんこんじき）・十一月の新嘗祭（にいなめさい）などと対応関係にある六月・十二月の月次祭（つきなみさい）と九月の神嘗祭（かんなめさい）です。それでは、年間二回の月次祭、そして神嘗祭とはどういう性格の祭りなのでしょうか。

古来わが国では、御先祖さまが非常に大事にされました。今日でも春分の日と秋分の日には、御先祖さまをお祭りしますが、昔も年二回御先祖さまのお祭りをすることになっていました。そのお祭りのことを神今食といっています。この朝廷の神今食と連動して、皇室の御先祖アマテラスオオミカミをおまつりする神宮では、六月と十二月に月次祭を行います。神宮の月次祭と朝廷の神今食、名称は異なりますが、まったく同じ意味のお祭りなのです。

つぎに神嘗祭について見てみましょう。神宮の神嘗祭と朝廷の新嘗祭はその年にとれたお米を、ご飯やお酒に調理して御先祖さまに召し上がっていただく収穫祭です。意味は同じですが、神宮の神嘗祭にはその年にとれた最初の稲を差し上げ、朝廷の新嘗祭ではその年とれた最後の稲をアマテラスオ

オミカミに差し上げてお祭りをすることになっていました。

年間二度の月次祭にしろ、神嘗祭にしろ、いずれも稲を基本にすえたお祭りです。春二月に行われる鍬山神事(注)を起点に、神宮の祭事暦は農耕とともにあるといっても過言ではありません。

ところで、神宮で神さまにお供えするものを見てみると、ご飯とお酒とアワビ・サザエなどの食べ物が中心ですが、見落としてならないものに糸があります。六月の月次祭には、禰宜(注)・大内人(注)・内人(注)などの神職や神郡(注)の人々によって糸が奉納され、九月の神嘗祭には禰宜によって神さまの着物が奉納されていました。このほかに四月十四日・九月十四日には神服部氏と麻績氏が織りあげた、絹織物と麻織物を奉納する神衣祭が宮司を中心に行われていましたが、これは古代の夏服・冬服の更衣の習慣から、律令制の導入時期にはじめられたものと考えられています。もともとは、月次祭や神嘗祭に糸もしくは着物を奉納するだけであったのです。

ということは、神宮のお祭りは、ニニギノミコトの天孫降臨(注)に際し、アマテラスオオミカミがお授けになった稲を中心にすえていますが、人間生活に不可欠な衣食を神さまに供える点に特色があったということになります。今日、多くの個人の家には神棚がありますが、毎日ご飯と御神酒を差し上

げるのが普通です。こうした日常祭祀(注)の基本の起源を求めると、古代の伊勢神宮のお祭りにさかのぼるのです。

二十年に一度の式年遷宮

神宮では二十年に一度、内外両宮をはじめ、末社(注)に至るまですべての建て物を建て替えます。これを式年遷宮(しきねんせんぐう)といい、天武天皇の時代に発案され、次の持統天皇がはじめて行われ、以後制度化されました。それ以前は、社殿が破損するにしたがい、修理が行われていたのですが、持統天皇の時代から、破損の有無にかかわらず、二十年に一度全社殿の建て替えが行われるようになったのです。

それではなぜ、天武天皇は式年遷宮を思い立たれるようになったのでしょうか。

天武天皇は即位される前のお名前を大海人皇子(おおあまのみこ)とおっしゃり、御兄には大化の改新を行い、律令国家の基礎を築いた天智天皇がいらっしゃいます。天智天皇がお亡くなりになった後、天智天皇の皇子大友皇子(おおともみこ)と大海人皇子は皇位をめぐり、朝廷を二分して争いました。これを壬申の乱といいますが、

大海人皇子は挙兵に際し、伊賀から伊勢に進まれ、神宮を遙拝(注)し、戦勝を祈願されました。大友皇子に勝利された大海人皇子は、天智天皇の都であった近江から旧都である飛鳥(あすか)に戻られ、翌年浄御原(きよみはらの)宮(みや)において即位され、天武天皇となられました。

天武天皇は、壬申の乱を勝利に導かれたアマテラスオオミカミをあつく信仰し、即位後ただちに斎宮(さいぐう)(注)に大来皇女(おおくのひめみこ)を定めて、神宮につかわされています。それは、ながらく中断されていた斎宮制度の復活でありました。この時、神宮の年中神事(注)も整備されたと考えられていますが、式年遷宮の制度の確立も、右のような天武天皇の御敬神のあらわれの一つとして、発案されたのでした。

ではいったいどうして二十年に一度遷宮は、行われることになったのでしょうか。

第一には、建築物の耐用年数の限界が二十年であるためといわれています。神宮の建築は古儀(こぎ)(注)が重んぜられ、古代の宮殿建築に採用された大陸伝来の礎石の上に柱を建てる工法ではなく、日本古来の掘立柱(ほったてばしら)(注)の工法が採用されています。この工法ですと、柱の下から腐ってくるのが早く、二十年が限界なのです。

第二には、造営の工法もそうなのですが、遷宮に際して奉納される宝物（普通神宝という）のつく

りかたや神職の作法などはすべて書物ではなく、口伝されておりました。昔は平均寿命が短く、技術や作法を正しく後世に伝えるためには、二十年程度が限界でした。

このように、建築物の耐用年数からも、技術の伝承からも二十年がもっともふさわしいと考えられ、二十年に一度の遷宮制が採用されたものと考えられます。

この遷宮の儀は、九月（今日では十月）の神嘗祭の日に、御神体を新しい御殿におうつしして、その後に通常の神嘗祭と同じお祭りを行って終了します。規模の大小の相違こそあれ、御遷宮は神嘗祭と同じ意義を有するお祭りなのです。極端ないいかたをすれば、御遷宮は、二十年に一度の大神嘗祭ともいうべきものなのです。

さきに、伊勢神宮のお祭りの基本は、生活に不可欠な衣食を神さまに差し上げることであるといいましたが、衣食だけでは生活できません。日常生活を送る住まいがなければ、生きていかれないのです。御遷宮は神さまにお住いをおつくり申しあげる儀式であり、この儀式で衣食住という生活をしていくうえでの必需品がすべてそろうのです。

外国から入ってきた仏教やキリスト教とは違い、神話を見ても、それから下った神社の歴史を見て

も、日本の神々は私たちと祖先、氏神と氏子というように実感的人のぬくもりによって血筋的なものまで時には含んでつながっています。神と人の間には、断絶はないのです。ですから神さまも私たちと同様、お食事や衣装、そしてお住いが必要です。そうした必需品を神さまに差し上げ、喜びをともにする。それが神社のお祭りの心といえましょうか。

伊勢原大神宮の遷宮

ここで、神宮ゆかりのわが「伊勢原大神宮」の歴史をふりかえってみましょう。伊勢原大神宮は、伊勢神宮を勧請㊟した神社です。江戸時代後期に幕府より編纂された『新編相模国風土記稿』には、御本社伊勢神宮にならい、当社でも、

二十一年目に、社頭修理を加へ、遷宮の式あり、

と、遷宮が行われていたとあります。お祭りの意義は、伊勢神宮とまったく同じです。

同書によれば、当時大住郡といわれた当地には、百十九の村がありました。そのうち約七十ヶ村が

何らかの形でアマテラスオオミカミを御祭神とする神明社をおまつりしていたと見えます。それらの多数の神明社の中で、当社のみが神明社にならい内外両宮別々の社殿をもち、修理という方法でも式年遷宮を忠実に行っていたということは、大変意義深いことです。このことからも当社は、他の神明社とは違い、伊勢神宮の事情に通じた人により建てられたことがうかがわれます。

第四章　神宮をめぐることども

平安時代から鎌倉時代にかけての神宮信仰

伊勢神宮は、前にお話したように、天皇のみがおまつりすることができる神社でした。国は、神宮を支えるため、古くは神宮周辺の多気（たけ）・度会（わたらい）の二つの郡を特に神郡㊟として献上し、そこからの租税で、お祭りの費用や神職の人件費がまかなわれていました。宇多天皇の時代には、さらに飯野郡が加えられ、神宮経済は、安泰かのように見えました。

しかし、事実はそうではありませんでした。なぜなら、神郡を神宮に献上している律令国家が、平安時代になると、順調に機能しなくなったのです。公地公民制㊟が解体し、神郡内にも私領（しりょう）が形成さ

れ、神宮の諸経費が不足するようになったのです。国側もなんとかこうした事態を打開したいと考えましたが、国にも税金が入らず、神宮経済を救済することができなくなりました。

神宮は、自力でお祭りを行うための経済体制の確立をはからなければならなくなったのです。

律令国家の衰退期は、旧来の氏族制度が変化する時期でもありました。特定の氏族によってのみおまつりされていた氏神が、ひろく他氏の人々にも信仰されるようになったのです。伊勢神宮は、皇室の氏神としてだけではなく、国家の神として仰がれていました。その国家の神伊勢神宮を、公的にではありませんでしたが平安時代中期頃には、一般の人々が親神さまと仰ぎ、参宮するようになったのです。律令国家が健全な頃には考えられないことでしたが、庶民の参宮が盛んになるにつれ、神宮信仰は急速に全国津々浦々にひろまったのです。

神宮の御神徳に接した地方の有力者たちは、神宮が経済的に困っている状態を無視できませんでした。そこで、自身の所有地を口入（くにゆう）神主（神宮神職）を通じ、神宮に寄進（寄付）する風習が生じました。こうした神領寄進（しんりょうきしん）に際しては、口入神主が寄進者の個人的祈願を取り次ぎました。本来個人祈願が許されていない神宮に、神領を寄進することにより祈願が許されるため、地方有力者たちはこぞっ

て寄進を行ったのです。

当時の地方有力者とは、新興の武士達です。八幡太郎源義家の有力な家来鎌倉権五郎景政は私領相模の国（神奈川県）大庭御厨(注)を、源頼朝の父義朝は下総の国（千葉県）相馬の地と、子息頼朝の昇進を願って安房の国（千葉県）丸御厨を神宮に寄進しています。こうして神宮は東国の武士達に、あつく信仰され、多くの神領を寄進されたのです。

この武士達が貴族政権をだんだん圧倒し、最終的には、源頼朝が鎌倉に武士の政権を開きました。頼朝も父義朝にならいあつく神宮を信仰し、たびたび私領や金銀を奉納しました。しかし彼は一度も神宮を参拝しませんでした。遠慮をしていたのでしょうか。自らは天照皇大御神を鎌倉にお招きして甘縄神明宮にまつり、そこでお参りをしていました。頼朝の後継者である代々の将軍や執権も神宮を丁重に信仰しました。そのため神宮信仰は鎌倉時代にますます盛んになり、貴族や武士、一般庶民のみならず僧侶にまで及んだのです。

伊勢神宮は古来仏教を避けてきました。忌詞(注)といって、神宮では唱えてはいけない詞がありますが、その中に仏を「中子」、法師を「髪長」、寺を「瓦葺」と呼べと見えます。つまり、神宮の中では、

仏教関係の詞を発することすら許されなかったのです。そうした神宮に、鎌倉時代以降、僧侶が多数参詣するようになりました。

平重衡に焼き討ちされた東大寺大仏殿の再興につとめた重源は、大仏開眼供養の後、多数の僧侶を引率して参宮しました。そしてその際、堂々と両宮の神前に大般若経を転読(注)し、その成功を神宮に感謝したのです。

またわが国を代表する歌人西行法師は、伊勢神宮を参拝したおり、僧侶の身ながら、

何事のおはしますかは知らねどもかたじけなさに涙こぼるる

という有名な和歌を詠み、神宮をあつく信仰したと伝えられています。

このように、伊勢神宮は僧侶にも熱心に信仰され、無住の『沙石集』に、

外には仏法うときこととなし、内には三宝を守り給ふことにておはすゆゑに、わが国の仏法、ひとへに大神宮のご守護によれり。当社は本朝の諸神の父母にておはす故也。

と見えるように、神宮は表面的には仏教を避けているが、実は仏教をかばいかつ守ってくださる神さまである、と考えられるようになったのです。そして伊勢神宮は、諸宗派を越え仏教をも守る護法(注)

の神と考えられるに至るのです。

このように、国民各層から立場を越えてあつく信仰されるようになった神宮へは、人々が多数お詣りするようになりました。

鎌倉時代後期、わが国はかつてない国難にみまわれました。蒙古（もうこ）襲来です。中国大陸を当時統一したモンゴルは中国風に国名を元と定め、西は遠くヨーロッパ、東は日本も侵略しようとして、攻めてきたのです。わが国は当時世界有数の黄金の産出国として知られており、元の皇帝フビライは豊富な金を欲しさに、攻め入ってきました。

元はもともと中国北方の騎馬民族です。集団戦にたけ、またたく間にヨーロッパまでを従えた事実が、その強さを雄弁に物語っています。まさに向かうところ敵なしというありさまでした。この元が、文永十一年（一二七四）と弘安四年（一二八一）に、二度日本に襲来しました。わが国の武士も良く戦いましたが、戦闘方法や武器に違いがあるため、たいへん苦戦しました。なんとか、戦いに勝てたのは、ちょうど上陸した台風のおかげといわれています。この台風のことを当時の人々は、「神風」と呼びました。

ところで、伊勢神宮の末社(注)として内宮に風日祈宮、外宮に風宮がおまつりされていました。この末社は、農耕に重大な影響を与える風の神さまをおまつりしていますが、蒙古襲来に際し、亀山上皇の命をうけた通海が本社に参詣し、蒙古退散の祈禱(注)を行いました。その直後に弘安の役が起り、またしても「神風」が元軍を撃退したのです。そのため神風は、「伊勢神宮が国難を救うため吹かされたもの」とちまたではうわさされるようになりました。

そして弘安十年に第三十二回目の外宮式年遷宮を迎えますが、人々は元軍を撃退した神宮の御遷宮と熱狂し、遠近より幾千万の人々が群参したと伝えられています。幾千万というのは誇張でしょうが、御遷宮に際して庶民が来集する風習がこのころ盛んであったことは、間違いありません。そして、この御遷宮に際して、多くの人々が神宮に群参するという風習は、現代にまでつづいているのです。

鎌倉時代に活発になった神宮信仰は、次の室町時代にますます盛んとなり、庶民はもとより足利将軍までもが華々しく参宮いたしました。その数は、義満が十一回、息子の義持は十六回に及んでいます。そして、足利将軍家のあつい神宮信仰の伝統は、五代義量、六代義教、八代義政にうけ継がれました。

諸国の神明社

これまでにも何度か書きましたが、神宮は信仰するもの誰でもが、自由におまつりできる神社ではありませんでした。したがって、古代においては、その分社(注)というものは、存在しませんでした。宮中の賢所(かしこどころ)(注)だけが、唯一の神宮の分社だったのです。

ところで、律令国家が崩壊して困ったのは、神宮のみではありませんでした。朝廷から封戸(ふこ)(注)など財政的援助をうけている寺社すべてが危機にひんしたのです。それらの寺社は、自ら荘園(注)を開いたり、神宮と同様地方豪族から土地の寄付をうけたりして新しい時代に対応しました。

そうした寺社は、自身の所領(注)となった土地へ末寺(注)や末社(注)を建立し、所領の精神的よりどころとしました。具体的には、春日大社と興福寺の所領には春日神社が勧請(注)され、熊野大社の所領には熊野神社が勧請(注)され、比叡山延暦寺の所領には延暦寺の鎮守日吉(ひえ)神社が勧請されました。

神宮もそうした時代の流行にならい、平安時代中期以降、所領として寄進された土地には、神宮の末社を建立するようになりました。ただし神宮という社号は、伊勢神宮に限られていましたので、神

宮の神領に勧請された神社は神明社及び神明宮と唱えました。

神明は、元来普通名詞で、単に神という意味ですが、古来、賢所の祭神（アマテラスオオミカミ）に限定して使用する慣例があり、そこから諸国の大神宮分社という意味に使用されるようになったのです。こうして、まず全国に散在する神宮の神領である御厨(みくりや)㊟を中心に、神宮の分社神明宮が建立されたのです。

しかし、南北朝の動乱や室町時代後期の戦国時代には、神領の地は武士に横領され、その実を失うところが多くなりました。しかし、一旦まつられた神明社は、その生命を持続し、領内の人々の信仰の中心とあがめられるようになりました。そしてさらに、神領の鎮守としての役目はなくなりましたが、それぞれの地方の大神宮の御神徳を代表する存在となっていったのです。神宮信仰を地方にひろめる神宮の下級神職御師(おし)㊟は、こうした地方の神明社を根拠として、いよいよ伊勢神宮の御神徳を津々浦々にひろめて行きました。

ところで、神宮の神領は全国にあまねく所在していたわけではありませんでした。したがって神明社も全国的に奉祭されていたわけではなかったのです。しかし、伊勢神宮信仰が国民各層にひろがっ

た室町時代になると、神明社をおまつりしていない地方でも、近くにぜひおまつりしたいと考えるようになりました。

飛び神明と神明社の建立

古来わが国には、神さまは自由に飛行して、ご自分の気に入られたところに鎮座されるという信仰がありました。伊勢神宮でも延暦十年（七九一）の御正殿焼失に際し、御神体が飛んで出られたという伝承があり、神さまが飛行されることは、めずらしいことではなかったのです。神宮は勝手におまつりしてはいけないという厳しいおきてがありましたが、神領とは関係のないところでも神さまが気に入られ飛んで行かれたといえば、誰も制止することはできませんでした。そこで、伊勢神宮が飛行して、全国いたるところに宮居を定められる「飛び神明」という信仰が盛んになり、神領という歴史的地盤とはまったく関係のない地に、神宮が多く勧請されるようになったのです。

ひとたび神宮奉祀(ほうし)(注)の禁が、飛び神明信仰によって解放されると、様々な形式で地方への勧請が行

われるようになりました。そしてついには、個人による神明社の建立までがはじまったのです。そうした一つの例をここにご紹介しましょう。

室町時代前期の応永三十三年（一四二六）、和泉の国（大阪府）堺北庄に陶末次という人がいました。この末次が伊勢神宮参宮を思い立ち、神宮で十七日の参籠(注)をしました。その十七日が明けた時、夢の中のお告げにより、鳥居のかたわらの長さ五寸程の青石をふところに入れ、本国に帰り、神明としておまつりしました。しかし、一向に気乗りがしませんでした。

ところが、それから一年たった翌年の正月、また夢の中で神さまが末次にお告げを下されたのです。そのお告げは、「今から、自分を西国に連れて行け」というものでした。驚いた末次は、さっそく青石を捧げ持って山陽道を下りました。備後の国（広島県）に至り、鏡山に滞在した時、末次の体は突然歩くことも、動くこともできなくなったのです。

末次は、これは神さまがこの土地に鎮座されることを願い、自分の体を動かないようにしているのだと悟り、持ってきた青石を御神体(注)としてその地に神社を建立しました。この話を聞きつけた村人が多数やってきて、この建立にあずかり、神社は鏡山の今伊勢社としてあつく崇敬されるようになっ

たのです。

このように、室町時代には個人により、託宣(注)というかたちはとるものの、神宮が勧請され、神明社として建てられることが多くなりました。そして中には、勝手な神明社建立を規制する立場にある神宮御師(注)が、地方での活動の拠点とするため建立した神明宮まで現れるようになったのです。

伊勢参宮の風習

こうした地方の神明社を中心に、この時代神宮信仰は、ますます全国に浸透していった結果、伊勢参宮がいよいよ盛んになりました。織田信長の父信秀(のぶひで)が伊勢神宮を尊崇し、外宮の仮殿遷宮の費用を寄進したことは有名ですが、そのほか周防(すおう)（山口県）の大内氏や小田原の北条氏も神宮を丁重に信仰しました。中には、伊予(いよ)の国（愛媛県）の大名西園寺氏のように敵国を突破して、参宮をあえて行った大名もいたのです。

このような大名や大商人とは違い一般の人々は、限りのある経済力の中で、伊勢講(注)もしくは神明

講というものを村落内で結び、若干の金銭を集めて元金とし、その利息を参宮の費用に当て、代表のものを参宮させるという風習を戦国時代頃からはじめました。その後、この風習は江戸時代には一般的となり、参宮のガイドブックとして『東海道中膝栗毛』をはじめ『伊勢参宮細見大全』・『伊勢参道里程抄』・『伊勢参宮按内記』・『伊勢参宮名所図絵』などの旅行記が多数刊行されました。これらの刊行物の多さが、伊勢参宮がいかに盛んであったかを物語っています。

第五章　伊勢原の神宮寺について

神宮寺と大覚院

（イ）　神宮寺

『新編相模国風土記稿』に見える照見山神宮寺

神仏習合㊟が一般的であった江戸時代、村持ち㊟のような特定の神職がいない神社は、お寺が管理にあたるのが普通でした。お祭りの時には、氏子が祭礼にあたりますが、普段の社殿や境内などの管

理は、社僧といわれる僧侶が行っていたのです。

江戸時代に、伊勢原神明社の管理にあたっていたのは、照見山神宮寺といい、めずらしい普化宗の寺院です。建物は、現在の社務所のあたりから西側にかけて建っておりました。第一章でも紹介しましたが、『新編相模国風土記稿』には、

社僧神宮寺、照見山と号す、普化禅宗、武蔵国青梅、鈴法寺末、本社と同時の起立にて、開祖雲晴風月、寛永十三年七月十一日卒、宗祖普化の画像を本尊とす、

と見えます。右によれば、照見山神宮寺は現東京都青梅市の鈴法寺末寺(注)の普化宗の寺院で、神明社の創建と同時に元和六年に建立され、開祖を雲晴風月といい、宗祖普化禅師の画像を本尊としておまつりしていました。

普化宗小史

ところで、普化宗とはどういう宗教なのでしょうか。日本では、普化宗は普化禅宗ともいい、禅宗

の一派に位置づけられ、江戸時代には臨済宗(注)の支配下に置かれていました（『国字分類雑記』二十七）。総本山には、関東中心の下総の国（千葉県）小金の一月寺、武蔵の国青梅鈴法寺と関西に基盤を置く明暗寺（妙安寺）がありました。僧侶は虚無僧といわれ、多くが有髪の半僧半俗姿で、筒形の深編笠をかぶり、袈裟をかけ、御経を読むかわりに尺八を吹きつつ修行しました。吉川英治の小説『鳴門秘帖』で活躍する美男剣士法月弦之丞の姿こそ虚無僧の典型的な姿です。深編笠で顔を隠し、尺八を吹きつつ歩む虚無僧の姿はいかにもぶきみで、往時は人々に敬遠されたといわれます。

さて、この普化宗は、中国の唐代に臨済宗を開いた臨済禅師の弟子と伝えられる普化禅師にはじまるといわれています。

日本への伝来については諸説がありますが、一般には宋代に中国に渡った法燈国師覚心が、普化の弟子張伯の末流を汲む張参に尺八の一曲をうけて建長六年（一二五四）に帰国し、伝えたといわれます。

法燈国師は帰国に際し、四人の居士(注)を同伴し、この人々が普化宗をひろげるのに活躍したともいわれていますが、確かなことはわかりません。普化宗の伝えによれば、四人の居士の一人室伏の弟子

金先古山が鎌倉幕府の執権北条経時の帰依(注)をうけ一月寺を建立し、室伏のもう一人の弟子括総門下の密雲哲秀が執権北条時宗の時代に武蔵国幸手藤袴村に鈴法寺を建てたといわれています。しかし、こうした関東における普化宗の展開を確かな史料に見ることはできません。

やや確実なところは、関西地方で、法燈国師の弟子虚竹が、普化宗の尺八の演奏法の基礎を作ったということです。一説によれば、普化宗は元来洞簫という管楽器を演奏していましたが、これを尺八にかえたのが虚竹であるといわれています。虚竹は京都宇治の吸江庵や明暗寺に住み、尺八の演奏法をひろめました。

降って応仁年間（一四六七～一四六九）ころ、朗庵というものが法燈国師の門流の末にあらわれます。朗庵は、有名な一休禅師とたいへん親しく交際し、常に尺八を吹いて楽しんでいたといわれています。京都の妙安寺に住み、その弟子が諸国に普化宗をひろめました。

これ以降、その姿が半僧半俗姿であり、尺八が武器としても使用できることなどから、普化宗は、戦いに敗れたり、政治犯となった武士達のかっこうの隠れ家となったのです。その代表的な人物に南朝の再興に尽くした楠正成の子孫正勝がいます。正勝は時勢が南朝に不利なことを知り、近江（滋賀

県）に身を隠しますが、その時虚竹の孫弟子虚風に出会いました。正勝は虚風の弟子となり、虚無（こむ）と名のり、半僧半俗の姿で諸国をまわり、普化宗をひろめ、名声を博しました。虚無の名は普化宗の代表的なものとなり、やがて世間では普化宗の僧侶のことを虚無僧と呼ぶようになったと伝えられています。

戦国時代が終り、徳川幕府のもと太平の世が開かれると、幕府の大名改易政策のため多数の浪人が出現しました。そうした浪人の多くが普化宗に入り、虚無僧全盛時代を迎えたといわれます。普化宗は多くの人々を迎えたため多数の分派を生じ、その数は照見山神宮寺や鈴法寺が属する括総派をはじめ十六派を数えました。しかし、この中で江戸時代後期まで存続したのは、括総・金先・寄竹・梅士・小菊・根笹・不智の七派だけでした。

延宝（えんぽう）五年（一六七七）に「普化宗門之掟（おきて）」が幕府より出され、普化宗は正式な宗派であることが公認されました。しかし、これよりはやく慶長十九年に「虚無僧之掟」（『寺社規刑集』所載）というものが幕府の主だった人々により定められたといいます。そこに虚無僧の身分規定を見てみると、

一、虚無僧の儀は、勇士・浪人一時の隠れ家のため、守護入らざるの宗門なり、よって天下の家

臣・諸士の席とさだむべきの条、その意を得べきこと、

一、虚無僧取立の儀は、諸士のほか一向、坊主・百姓・町人、下賤のもの取立つべからず、

とあり、虚無僧の身分は武士であり、百姓・町人をみだりに虚無僧に取り立てることを厳しく禁じています。さらに普化宗には、「虚無僧之掟」が出された慶長十九年、徳川家康よりたまわったと伝えられる「東照宮御条目」という虚無僧優遇の特別な法度（法令）がありました。この法度を楯に普化宗は制外的権威を振るい、武士にして世を忍び、または罪を犯したものが普化宗配下の虚無僧となった場合、幕府の寺社奉行㊟や諸大名でもなかなか手をつけることができませんでした。虚無僧達はこうした特権を家康や幕府の要人より内々に与えられ、公儀隠密役を勤めているなどと唱え、人をはばかることなく諸国をめぐっていたのです。

こうした目にあまる虚無僧の華美で勝手気ままな振る舞いを抑えるため、寛政六年（一七九四）幕府の特別警察火付盗賊改方の長谷川平蔵は、寺社奉行㊟松平右京亮輝和に取り締まりの意見を出しました。しかし、松平輝和は、「古来の御条目あり」ということで、平蔵の提案を退けました。寺社奉行松平輝和は、普化宗の所持する「東照宮御条目」や幕閣の要人達が出したと伝えられる「虚無僧

之掟」を本物と考え、虚無僧取り締まりをためらったものと思われます。

このように寺社奉行や各藩の関係者までをも震え上がらせた虚無僧優遇の掟や御条目は、ようやく半世紀後の弘化四年（一八四七）、当時の寺社奉行脇坂安宅（わきざかやすおり）によりにせものであることが証明されます。ここに普化宗の特権はまったく否定され、虚無僧達は幕府や各藩から遠慮会釈なく取り締まられる対象となりました。このため幕末には、江戸の町を修行する虚無僧の数はめっきり少なくなったといわれています。

それにしても、こうしたにせものである掟や御条目が江戸時代後期まで本物と信じられ、寺社奉行の松平輝和や長谷川平蔵までが虚無僧に手を出せなかったのはなぜでしょうか。それは、当時の虚無僧の多くが、本当に掟や御条目に見えるような上級武家の出身者であったためだと考えられます。安政二年（一八五五）の寺社奉行上申書によれば、幕府は旗本㊟の隠居や御家人㊟の厄介者などが日限の印鑑をうけ、虚無僧として笛吹修行に出ることが流行しているが、これは世上の風俗にも関わると深く憂慮しているものが出されているほどです。実際、当時高級武家が虚無僧となることは決してめずらしいことではなかったのです。こうした事実が、掟や「東照宮御条目」というにせ文書の信頼性

を高めたものと思われます。

神宮寺小史

さて伊勢原の神明社の神宮寺は、武士でなければ入門できない高い格式を誇る普化宗の寺院でした。そして神宮寺の直接の本山括総派の鈴法寺は、下総（千葉県）松戸の一月寺とならぶ普化宗の関東における総本山㊟（総触頭）でした。

「普化禅宗階級衣体之次第書」によれば、神宮寺は布田（現東京都調布市）の式内社㊟布多天神社に隣接する安楽寺とともに、鈴法寺法頭㊟・末寺頭という高い寺格で、鈴法寺配下の普化宗諸寺院を支配しておりました。普化宗の普通の寺院のものは紺黒の袈裟・衣を着用していましたが、神宮寺の住職（看主㊟）は、衫㊟付の衣と色目の袈裟の着用を許されていたのです。また同書によれば、本山鈴法寺住職には、神宮寺及び安楽寺から選ばれることになっていました。つまり、神宮寺住職になるということは、普化宗の中では最高のエリートということになるのです。

鈴法寺住職ともなりますと、その就任に際しては、江戸城に行き、将軍にあいさつすることになっていました。また、五年に一度は、年始あいさつのため城へ行かなければいけませんでした。一説によれば、その時の行列は、五万石の大名の格式であったともいわれています。五万石の大名といえば、忠臣蔵で有名な浅野内匠頭（あさのたくみのかみ）が五万三千石でしたから、浅野家なみの供揃いで江戸城に向かったのです。

神宮寺の歴代住職及び看主については、渡辺照洞氏が、その著『神奈川県伊勢原の虚無僧寺―照見山神宮寺―』の中で、従来の記録や安達久雄氏の研究と、大福寺に現存する墓石並びに普済寺及び東京牛込の法身寺の過去帳（こちょう）㊟などから、たいへんくわしく整理されたものを出していらっしゃいます。それと高橋空山氏の『普化宗史』に神宮寺歴代を見てみますと、以下のようになります。

開山　雲晴風月　寛永十三年没
二世　寿山風雲又は益道意　寛文四年没
三世　法雲無形　寛文六年没
四世　心翁念外　元禄六年没
五世　空覚了道　享保八年没　墓所神宮寺

六世　蘭山快秀　延享四年没　墓所神宮寺
七世　空山祖来　寛政八年没　墓所神宮寺
八世　雲山雄長　寛政四年没
九世　竹溪嘯虎　文政十年没　墓所神宮寺
十世　閑山戢我　天保八年没　墓所法身寺

神宮寺歴代の看主及び住職中何人かの過去帳や墓が、臨済宗の寺院である東京牛込法身寺や普済寺にあるのは、先に触れましたように、江戸時代には普化宗が臨済宗の支配下にあったためです。神宮寺に墓所のあった住職の墓は、現在大福寺にあります。関係者の話によれば、もともと神宮寺の墓は、社殿後方の盛り土の側にあったそうですが、大正十二年の関東大震災の際、神社の社殿その他が崩壊したため、翌十三年近所の大福寺に移した

大福寺の神宮寺住職墓地

といわれております。大福寺には、五世空覚了道・七世空山祖来・九世竹溪嘯虎及び鈴法寺前住職嘯山勇虎の墓があり、丁重に供養されています。

さて、神宮寺の住職は先ほどいいましたように、普化宗の本山鈴法寺の住職になる資格がありました。実際その経歴を見てみると、七世空山祖来・十世閑山戢我が神宮寺より鈴法寺住職に昇進し、反対に安楽寺十五世から鈴法寺二十六世に昇進した嘯山勇虎は神宮寺に退き、この地で没しています。また、勇虎の弟子であったと想像される竹溪嘯虎も鈴法寺住職から神宮寺九世となりました。八世雲山雄長は同格の安楽寺二十世に転任していますが、九世竹溪嘯虎と十世閑山戢我はすでに安楽寺住職を経験しています。要するに本山鈴法寺と末頭神宮寺・安楽寺は、三寺の間で人事の交流が盛んだったのです。

このように、神宮寺の歴代には、本山(注)住職に昇進するものや経験者が多数いたのです。本山住職といえば、大名なみの格式を許され、江戸城に行くことができる資格をもっていました。そうしたきわめて身分の高い人々が、歴代住職を勤めていたということは、神宮寺のみならずめずらしい内外両宮の社殿をもつ神明社の歴史を考える上で、見逃せないことです。

一般に普化宗には、名門の武家が入門し、虚無僧に身をやつして仇討ちの機会を待ったり、仙石騒動㊟の神谷転のように主家の復興をはかったりするものが多くいました。それは、虚無僧であれば、人知れず諸国をまわって修行ができ、敵を見つけられるところに魅力があったためでしょう。このように、武家が身を隠すに最適であった普化宗には、内々に公儀隠密としての仕事があったといわれています。布田の安楽寺は甲州街道沿いに、建てられています。神宮寺は矢倉沢街道沿いにあります。両方ともきわめて寺格は高く神社に関係していますが、虚無僧が直接祭祀にたずさわった形跡はありません。そうすると、修行に出やすい街道沿いに寺地を占めているのは、公儀隠密の重要拠点であったからかもしれないのです。

さて、普化宗寺院は、一般寺院とは違い、修行の寺であり、檀家㊟をもっていませんでした。収入は、場先という地元周辺のうけもち地域や、諸国をめぐる修行の際には修行先の寺院の場先（場越）から得ておりました。このほかに、托鉢・紛争の仲介・茶筌製作・風呂屋の志銭・尺八教授等で収入を得ましたが、なんといっても場先からの収入が大きかったのです。この場先での虚無僧のふるまいは、あまり感心できないものがあり、幕府は安永三年（一七七四）、

近年村々へ、虚無僧修行のていにて参り、百姓どもへねだりがましき儀申し掛け、或いは旅宿を申し付け候様、役人どもへ申し候故、宿取りつかはし候得ば、麁宅にて止宿なりがたき由を申し、あばれ、その場に居合ひ候もの共を、尺八にて打擲いたし、疵付け候儀これある段相聞こえ、不届きの至りに候、虚無僧修行致し候は、志し次第施物をうけ、夜に入り候はば、相対にて一宿致すべき筋に候あいだ、以来虚無僧共、いささかも不法の筋これあらば、その村方にて差し押さへ、御料は代官ならびに御預所役所、私領は地頭役所へ、早々召し連れ出すべし、もし相背くにおいては、その村方越度たるべきものなり、

という御触れを出し、村方へ泊まるに際し、不法にもんくをつけたり、乱暴を働く虚無僧の取り締まりを命じています。

神宮寺関係の虚無僧にも、地域住民に迷惑をかけるものがあったらしく、西富岡村の堀江家には、

取締證文

一、この度双方勝手を以て来る未歳より亥歳まで五ケ歳の間、取り締まりに相定め申し候、しかる上は、他寺の虚無僧止宿笛吹き、差しとめ置き申し候、もっとも御用の節は、止宿致し、

無用のみぎりは、止宿お願ひ申し候、尚亦無体の儀に付きむつかしき儀出来候とも、その御村方へ少しも御難渋相掛け申すまじく候、後日のため、よってくだんのごとし、

天保五歳　　照見山神宮寺

甲午　九月二十九日　　役僧

西富岡村

御役人中

（原漢文）

という神宮寺より西富岡村の村役人に出された虚無僧の宿泊・笛吹き取り締まりの證文が残っています。村へは迷惑を掛けさせないようにするという文から、虚無僧が住民に目にあまる迷惑をかけていたことが、想像されま

虚無僧取締証文

す。

しかし、虚無僧が乱暴狼藉を働くのも、しかたがなかった面もあります。先ほども触れましたように、檀家がなく、有力な後援者がいなかったため、幕府より禁令が出されても、村々に無理をいってお金やものを要求せざるを得なかったのです。『小稲葉村古文書』には、文政十二年（一八二九）の石田村名主㊟にあてた神宮寺の前借関係の書状がのっていますが、このたびを限り、以後一切前借寄進などの願いはしないと誓約をさせられています。この文書は、当時の神宮寺の苦しい経済状況をあますところなく語っているといえましょう。

普化宗が追放されて

ところで、江戸時代後期になると、国学という古典を研究し、日本のあるべき姿を求める学問が盛んになってきます。それまでの日本の古典や神社の研究は、仏教や陰陽道㊟の影響をうけた考えによりどころのないものがほとんどでした。ですから儒学によって近世的合理主義を身につけた当時の知

識人にとっては、物足りない感じがぬぐえませんでした。そうした中で、荷田春満（かだのあずまろ）や本居宣長（もとおりのりなが）によって開花した国学は、文献学に裏打ちされた新鮮な学問という印象を知識人に与え、当時都会・地方を問わず、国学は、ひろくうけ入れられて行きました。

それまで、日本古典及び神社神道の家元として君臨していた京都の吉田家・白川家㊟は、国学の発生によって、古い教学㊟を修正しなければならなくなりました。両家ともに、本居宣長の後継者平田（ひらた）篤胤（あつたね）を招き、教学面の充実をはかったのです。白川家は、文化五年（一八〇八）篤胤に神職へ神道伝授を依頼しました。この篤胤への依頼は、平田系国学者の白川家への入門を促進したのです。

伊勢原地方では、三宮比々多神社の神主大貫氏が白川家江戸役所の役人を勤めており、白川家の門人獲得に努力していました。こうした大貫氏の影響のためでしょうが、文化八年大山の手中明王太郎が白川家に入門しました。『白川家門人帳』によればこれに続き、文化十五年三月、伊勢原村の神宮寺継興（つぐおき）というものが初入門しています。安政年間（一八五四～一八六〇）には、大山関係者の大量入門がありますが、神宮寺継興の入門はそれ以前のことです。継興は、この入門で立烏帽子・布斎服（さいふく）㊟の着用を許可されています。

ところで、この継興とは、どういう人物だったのでしょうか。当時の神宮寺の代表は、九世竹溪嘯虎です。彼は、普化宗総本山鈴法寺住職を退き、神宮寺住職となっていました。普化宗では、剃髪(注)したものを住職と呼び、半僧半俗姿のものを看主と呼ぶことになっていました。竹溪嘯虎は鈴法寺住職を経験している以上、出家姿をしていたと考えられます。そうした僧侶の身で、立烏帽子・斎服(注)を着たとは、考えにくいので、継興と竹溪嘯虎とは、別人と考えられます。そうすると、継興は神宮寺の門弟ではなかったか、と考えられます。いずれにしろ、江戸後期には、神宮寺関係者の中から、白川家に入門して、神道を学び、神職として神明社に奉仕しようという人物が出たことは間違いないように思われます。

しかし、こうした神宮寺関係者の努力にもかかわらず、明治四年（一八七一）の普化宗の廃止以前神宮寺は退転(注)し、同八年以降その建物は、伊勢原小学校の前身恢立館となるのです。

大神宮境内に残る神宮寺の遺跡

ところで、往時の神宮寺の姿をしのぶ遺跡が、境内に現在でもいくつか残っています。石燈籠が三基、石造円柱、手洗い鉢などがそれです。石燈籠には、

延享四丁卯祀
奉献石燈籠
越光弥七郎
願主
越光嘉十郎

と刻まれているものが二基と、

照見山神宮寺空山祖来代
奉献石燈籠

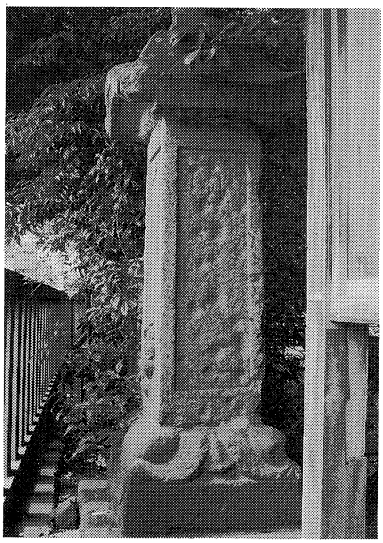
境内の神宮寺遺跡

越光弥七郎

願主

越光嘉十郎

と刻まれたものが一基あります。どちらも延享四年（一七四七）に作られたもので、笠石は四個ありますが、サオ石は三個しか見あたらず、火袋石は一つもありません。『神奈川県伊勢原の虚無僧寺』の著者渡辺氏は、これらが墓前燈籠であることから、六世蘭山快秀の供養燈籠ではなかったか、と推定されています。



寛文年間の庚申塔

石造円柱には、表に、

長島与兵衛

施主

長島治左エ門

奉納御宝前

寛延三庚午歳十一月吉祥日

裏に、

照見山神宮寺空山祖来代

と刻まれており、寛延三年（一七五〇）に製作されたものであることがわかります。

手洗い鉢には、

文政十二己丑九月二十二日、照見山神宮禅寺兼住閑山戢我

と見え、文政十二年（一八二九）当時安楽寺住職で神宮寺の住職を兼任していた閑山の頃、寄進されたものです。

これらの遺跡のほか、現在大神宮には、神宮寺の空山祖来が、その弟子に与えた諸国をめぐる修行のための往

文政年間の手洗い鉢

来切手一通が残されています。左に掲げますと、

延享戊辰五年正月

門弟子

吟夕

往来

此の虚無僧拙寺門弟ニ紛れなく御座候、国々御関所・海陸ともに相違これ無く御通し下さるべく候以上、

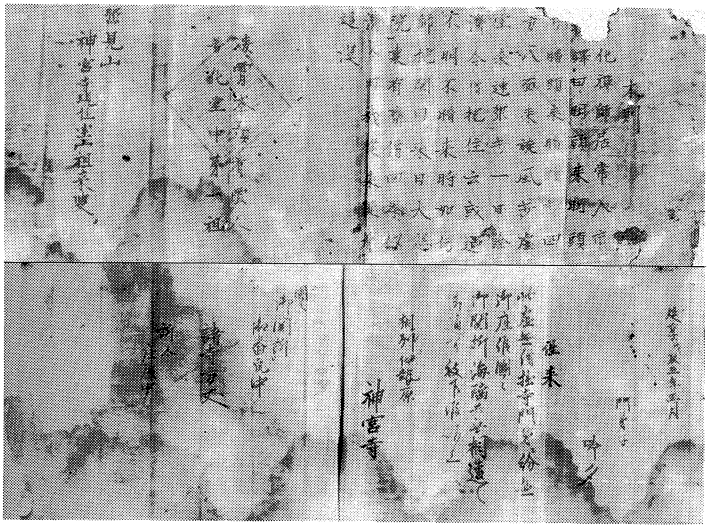
相州伊勢原

神宮寺

国々

御関所

御番衆中



空山祖来の出した往来切手

諸寺方丈
所人
庄屋中

とあります。裏には普化宗本則が記されており、神宮寺門弟吟夕は、この切手を大事に懐におさめ諸国をめぐり修行したものと推測されます。

（ロ）大覚院

神明社の勧請大法主（ほっす）を江戸時代、代々勤めたのが、当山派修験の知水山大覚院（ちすいざんだいかくいん）です。『新編相模国風土記稿』には、

知水山と号す、当山修験、（江戸青山鳳閣寺配下、）開山聖真、（慶安四年九月卒、）本尊不動、

と見えます。

修験宗とは、仏教と在来の土俗的神祇（じんぎ）㊟信仰が習合し、山を修行の場とするこの世の利益を重く見

るわが国独特の宗教です。天台系の聖護院を本山とする本山派と、真言系の醍醐寺三宝院を本山とする当山派、以上大きな二つの流派がありました。関東では、聖護院門跡准后道興の文明年間（一四六九～一四八七）の東国廻国以来、本山派が主流を占めるようになったようです。伊勢原近辺では、小田原の本山派修験玉滝坊配下の修験が多かったのですが、大覚院は関東の修験寺院ではめずらしく当山派に属していました。配下には、温水村清宝院・荻野村学禅院・東富岡村大乗院などがありました。

この大覚院が、歴代神明社の勧請大法主を勤めたといわれています。実際、正徳二年の社殿建立の棟札には、「勧請大覚法印覚山法主」とあり、享保十六年奉納の愛宕神社の鐘銘にも、「勧請法主大覚院」と見えます。したがって、江戸時代より大覚院が神明社に関係したことは間違いないようです。江戸時代村持ちのような神職不在の神社は、真言・天台両派の修験系の寺院が別当を勤めることが多くありました。神明社には神宮寺がありましたが、尺八の吹奏を修行の中心とする普化宗では、神社への日々の祈願の取次などは無理であったように思われます。そこで真言系の修験大覚院がはやくから神明社に関係をもつようになったのではないでしょうか。明治二年の『神社別当復飾其外名前書』によれば、大覚院は神明社別当と出てきます。幕末から明治初頭にかけて大覚院は、神明社に大きな

発言権を有するようになり、神宮寺を退転させ、名実ともに別当寺となったのではないでしょうか。

この大覚院の子孫が、明治以降神明社の社掌を勤めた宮本家です。宮本家の先祖書き上げには、大覚院及び宮本家歴代について、

直明法印　天正七年葬
明道法印　慶長十二年卒
正全法印　寛永四年葬
正真法印　慶安三年葬
禅定法印　寛文八年卒
乗山法印　元禄七年葬
乗全法印　正徳二年葬
覚山法印　寛保元年葬
玄慶法印　宝暦七年葬
大教法印　寛政九年葬

大覚院宮本家の墓

大藤法印　文化十年葬
王応法印　文政七年卒
寛順法印　文久二年葬
宮本宣信　大正十年葬
宮本重麿　大正十年葬
宮本豊治　昭和四十六年没

と見えます。前にあげた『神社別当復飾其外名前書』には、「神明社別当　大覚院　知水大学」と見えますが、この神明社神主知水大学は、現大神宮所蔵の明治二年の遷宮祭の時に奉納されたと思われる棟札に見える「神主知水大学源善信」と推測されます。知水は大覚院の山号「知水山」に由来し、大学という官途名乗りは大覚院の「大覚」にちなんだものと考えられます。知水大学善信こそ、弘化三年十二月に誕生した大覚院寛順法印の跡取り、後の神明社社掌宮本宣信なのです。

第六章　年中行事

年間の祭礼

伊勢原大神宮の例祭㊟は、『新編相模国風土記稿』によれば、旧暦の六月十五・十六両日に行われていました。いわゆる今日でいう夏祭りですが、この日はちょうど伊勢神宮の重大祭礼三節祭㊟の一つ月次祭（毎月のものではありません）の日に当たります。伊勢神宮では、十五日に外宮で、十六日には内宮で、お祭りが行われたのです。

『新編相模国風土記稿』に他の神社の祭日を見てみると、田中の十二柱神社は旧暦六月二十三日、板戸八雲神社は旧暦六月二十二日、池端の御嶽神社は旧暦八月二十二日、東大竹の八幡神社は旧暦九

月十九日でした。一見して明らかなように、二日にわたって祭礼が行われている神社はありません。二日間にわたって祭礼が行われているのは、大神宮だけなのです。それのみならず、二日間にわたる例祭は、伊勢神宮の祭日に合致します。これは、祭日にしろ、祭礼形式にしろ、当社が伊勢神宮を強く意識していたためと思われます。

この大祭が近代以降、九月二十一・二十二日の二日間に変更され現在に至っています（現在は二十一日前後の日曜日）。大祭に際しては、かつては神楽及び歌舞伎や相撲が奉納され、山車の上では日本舞踊が上演され、たいへんにぎやかであったといわれています。『新編相模国風土記稿』に「神事舞大夫、小林市大夫」と見えますが、こうした舞大夫によって江戸時代にも神楽が奉納されたものと思われます。

近代以降も神楽は盛んで、古老鈴木保冶氏によれば、愛甲から神楽師萩原詳太郎という人を招き奉納していたといいます。また、相撲奉納も盛んで、大祭の二日目の二十二日に取り組みが行われたそうです。その時には、本職の相撲とりを迎えたり、近郷近在の力自慢が出場して終日にぎわいましたが、境内内宮南庭の相撲場を中心に桟敷が作られ、氏子のみならず隣村の人々も家族連れで見物に来

たといいます。大人相撲が中心ですが、子供相撲もなかなか盛んでありました。鈴木氏によれば、戦前この相撲奉納を取り仕切ったのは、鳶職頭の八田亀吉さんという方だったそうです。

このほかに、橋本浩八氏によれば、戦前には青年団が手伝い歌舞伎奉納も盛んに行われていたそうです。

さて大祭は、前日の宵宮という祭典準備にはじまり、祭礼翌日に行われるハチハライという後片付けと直会(なおらい)㊟で終了しました。戦前の祭礼経過の一端をうかがえる昭和十年の大祭に際し出された通知を掲げます。

御多忙中恐れ入り候へ共、大祭執行に関し左記各項漏れなく貴組合御一同へ御伝達相成度御通知申上候。

左記

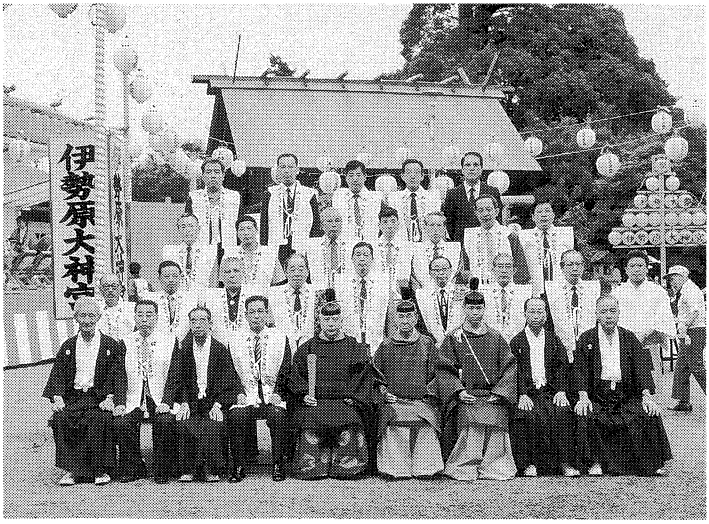
一、祭典　九月二十一日、

一、餘典　同二十一日、里神楽、

同二十二日、相撲、踊舞台

一、二十日午前中ニ各自提灯枠ヲ立テル事、
一、相撲桟敷抽籤二十日午前九時ヨリ正午迄、
但シ一枡金一円也、（現金ノ事）

先ほど触れましたように現在の例祭日は、九月二十一日前後の日曜日です。前日午後六時より宵宮祭が行われ、総代が祭典に参加します。当日祭は、早朝より社殿が装飾され、外宮と内宮で祭典が行われます。総代以下太鼓連までが参加し、祭儀は厳粛に執り行われるのです。午後二時より民謡・舞踊の奉納があり、夜は芸能人を招いて余興が行われます。ちなみに、平成二年の大祭には歌手の畠山みどり・智鶴祐加の二人とダーク太陽が舞台に立ちました。翌日午後一時には神輿渡御が行われ、行在所二ケ所で祭典が行われ、四時に本社に還幸し、大祭が



大神宮の例祭

終了します。

今日、戦前のような神楽奉納はなくなりましたが、昭和四十三年から子供達によるお囃子がにぎやかに奉納され、神さまの御心をお慰めしています。演奏曲目には『子供祭りばやし』・『子供昇殿くずし』・『子供伊勢原ばやし』の三曲があります。神輿の渡御に供奉する子供達のお囃子は活力にあふれ、祭礼気分をいやが上にも盛り上げています。

なお、橋本浩八氏によれば、昔は神輿渡御は御祭神が女神さまということで行われず、山車の巡幸のみがあったそうです。お祭りに際し、氏子地域内十ヶ所にある山車が神社に集合し、行列を組んで巡幸しました。その山車の上では、娘さんたちによりはなやかな日本舞踊が踊られたといいます。

現在の年中行事

さて、次に現在大神宮で行われている一年間のさまざまな神事を御紹介しましょう。

○歳　旦　祭　一月一日には氏子世話人及び自治会長・商店会長・婦人会長・子供会長等が参加し

て、新年を祝う歳旦祭が執り行われます。午前八時よりはじまり修祓の儀、そして祝詞奏上が行われ、玉串をおさめて終了します。

○道祖神祭　ドンド焼きが行われます。

○紀元祭　二月十一日、神武天皇の建国をお祝いします。

○祈年祭　二月十七日、今年の豊作や気候順度などを大神さまにお祈りいたします。

○春分祭　三月二十一日。

○桜祭　昔は小祭が四月十七日に行われていましたが、現在は桜の時期をみはからい氏子総代などの役員のみならず、地元

桜祭

関係者が多数参加して行われています。なお、桜祭には秋の例祭と同様に余興が行われ、露天商が出ています。

○大　祓　式　六月下旬。氏子の方々の一月から六月までの半年間の罪穢を祓います。茅輪(ちのわ)(注)を作製し、社前で祭典が行われます。

○例　大　祭　九月二十一日。

○秋　分　祭　九月二十三日。

○神　嘗　祭　十月十七日、伊勢神宮の大祭神嘗祭にあわせ、当社でも神嘗祭を行い神宮の大祭を祝います。

○明　治　祭　十一月三日、明治天皇の御生誕日をお祝いします。

○新　嘗　祭　十一月二十三日、今年の豊作などを神さまに感謝申しあげます。

○大　祓　式　十二月下旬。

○除　夜　祭　十二月三十一日。

このほかに、毎月一日と十七日に月次祭が行われています。

以上のような年中恒例神事のほかに、『新編相模国風土記稿』に見えるように、大神宮には二十一年目毎の遷宮祭が重要神事としてあります。焼亡や地震等のための転倒の後、臨時に遷宮祭が行われますが、御本社伊勢神宮と同様、次回以後は臨時の遷宮祭から二十一年目に遷宮祭が行われることになっていました。現在の御社殿は、昭和四、五年の創建ですが、前回の御遷宮は昭和四十七年に行われました。その昭和四十七年から二十一年目が、平成四年です。本年はまことにめでたい遷宮祭の年にあたるのです。

境内にある神社

『新編相模国風土記稿』には、江戸時代の大神宮の末社について、

末社　愛宕・虚空蔵（こくぞう）・不動合祀（ごうし）㊟、愛宕は村民加藤氏の者勧請す、鐘楼あり、享保十六年の鋳鐘をかく、序銘あり、文中に当村開墾及び本社勧請等の事を載、土人の伝に異ならず、　稲荷・三峯・恵比寿・道祖神・大黒・秋葉・弁天・天神・八幡・天王・金毘羅（こんぴら）、

とあります。右によれば、享保十六年以前に加藤某により防火のため建てられた愛宕神社をはじめ、

江戸時代に信仰を集めた代表的な神社がほとんど境内神社として勧請されていたことがわかります。

稲荷神社及び恵比寿神社・大黒社は商売繁盛の神さま及び農業の神さまとして古来有名です。三峯神社は秩父の三峯山観音院を御本社と仰ぎ、火防(ひぶせ)(注)・盗難よけの神さまとして、今日でも関東一円のみならず東北地方からも信者が多数参拝することで名高い神社です。秋葉神社も愛宕社・三峯社と同様火防(ひぶせ)の神さまとして、全国的に崇敬されています。

道祖神は交通の神さま、金毘羅さまも海上交通の神さまとして知らない人はいないでしょう。天神・八幡等の神さまは、応神天皇や学問の神さま菅原道真としても有名でしたが、天王社と同様当時は疫病を防ぐ神さまとも考えられていました。

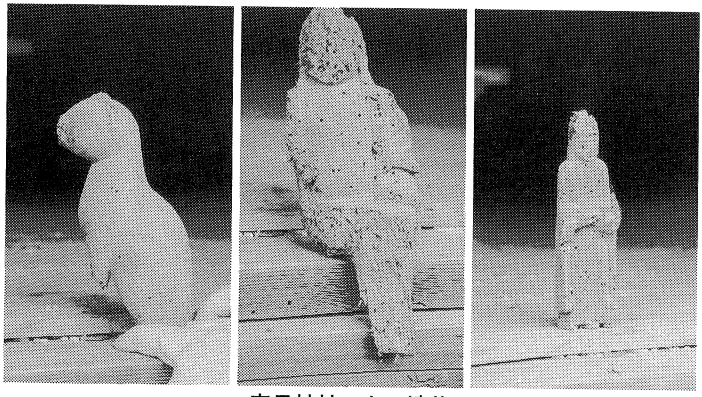
江戸時代の伊勢原大神宮の末社の勧請傾向は、火防の神・商売の神・交通の神・盗賊よけの神・疫病の神等を奉祭する都市型のものであったのです。宿場町そして地域周辺の流通の拠点として発展した伊勢原の歴史は、こうした末社の勧請傾向からもうかがうことができるのです。

これらの末社は、橋本浩八氏の話によれば、関東大震災前には、丁重におまつりされていたそうです。外宮本殿の東側には恵比寿・大黒・稲荷・弁天社等がまつられ、外宮鳥居の東南に道祖神が鎮座

し、外宮の背後には浅間神社をはじめとする末社群が鎮座していたといいます。また、内宮南庭の相撲場の西側には金比羅さまがおまつりされておりました。

現在、大神宮の境内神社としておまつりされているのは、天児屋根命（アマノコヤネノミコト）を御祭神とする春日神社のみです。春日神社は、古来わが国の貴族中の貴族といわれた藤原氏・中臣氏の氏神として有名です。皇室の御祖先天照皇大御神を奉祭する神社では、皇室を代々摂政関白としてお助けした藤原氏の氏神春日神社をあわせておまつりしているところが多くあります。当社に春日神社がおまつりされているのも、そうしたところに由来しているのかも知れません。

なお、春日神社の社殿の中には、当社の神仏習合時代の遺物が奉安（ほうあん）されています。明らかに仏像であるものが一体、残存形



春日神社にある遺物

態から仏像と推測されるものが一体、そして動物の彫刻のようなものが一体です。

境内社として多数の著名神社が勧請されることは、御本社の御神徳の偉大さのあらわれといいます。そして、その勧請には、時代の流行や土地柄が、大きく反映しているのです。当社の末社の勧請傾向には、先ほども触れましたように、都市型の傾向があきらかに見うけられます。

元和六年の大神宮創祀以来、人々が行き通う宿場町として発展した伊勢原には、多くの信仰が起りまた消えていきました。宿場町の宿命として、火事・盗賊の出現・疫病の流行等は、防ごうにも防げないものであったからです。人々はそうした災厄からのがれるため力をもったいろいろな神仏に祈りました。そうした様々な職能をもった流行神を大神宮はその大きな懐に包み込み、末社として吸収し、現在に至ったのです。

明治以降どこの神社でも末社の多くが整理されましたが、本社とは別な意味で、末社は時代時代の地域住民のあつい信仰の特色を今に伝えているのです。これから先、ますます末社勧請のいきさつが解明されると、地方都市伊勢原の宿場町としての発展の歴史がさらにくわしく明らかになると思われます。

さらに現在では伊勢原は、そこを通る主要国道二四六号や小田急線、そして伊勢原を中心に各地に走るバス網などにより、交通の中心として宿場町の機能を立派に果たしていますが、それに加えて、東京を中心とする首都圏の重要な住宅街として、またその人々の利用する商店街として、さらには昔ながらの大山登山をはじめ丹沢連峰へのレジャー基地として、最近は学園都市としての機能ももつようになってきています。伊勢原という土地の将来性はいよいよ高まっていくものと思われます。

このように発展する伊勢原の中心としての伊勢原大神宮の未来はいやおうなしに高まるでしょうし、また皆で神社の繁栄を心がけていかなければなりません。立派な歴史と伝統をもつ伊勢原大神宮のいよいよの発展を祈りながら、このささやかな『伊勢原大神宮史』をしめくくらせていただきます。

あとがき

昭和六十二年、國學院大学の阪本是丸助教授より『伊勢原大神宮史』執筆のお話をいただいた。助教授はたぶん私が伊勢神宮の研究を未熟ながら専門としていたために、適任とお考えになったのであろう。しかし、私の研究分野は古代の伊勢神宮及び宮中祭祀で、江戸時代に創建された大神宮の歴史を執筆することには、ためらいがあった。

同年十二月、厚顔にも大神宮に参上して、宅野宮司、今は亡き山田亀雄総代、そして西野忍総代にお会いすることとなった。

伊勢神宮と同様立派な内外両宮の御社殿を構えた神社に参拝し、お三方の熱心なお話をうかがううちに、未熟・若輩ながら伊勢神宮を研究している私にも、神宮とゆかりの深い伊勢原大神宮の研究でお役にたてることがあるかも知れない、と考えるようになった。そして、大神宮の歴史を執筆させていただくこととなったのである。

当初、昭和六十三年四月より史料収集作業を開始し、六十五年の三月上梓の予定であったが、この間昭和天皇の崩御、翌年の今上天皇の御大礼などがあり、専門の分野で多忙になったため研究を休ませていただいた。勝手な申し入れに御理解を示して下さった関係各位には、ただただ感謝の意を表するのみである。

御代もあらたまり、平成三年、史料収集を再開したが大神宮の歴史は、予想以上に不明な点が多く、また私が地理不案内のため、作業はなかなか進捗しなかった。と同時に自分の無力さを、この時ほど痛感したことはなかった。

こうした日々を過ごしていた時に、幸いにも私は伊勢原市史編纂に従事しておられた青山学院大学大学院の山口研一氏とお会いする機会を得た。山口氏には、いろいろと御助力をたまわり、更に市史編纂委員の小野鉄朗先生を御紹介していただいた。小野先生は周知のように近世初頭に成立した伊勢原について精力的な研究を展開されている方であり、焼却寸前であったこのお宮の近代史料を発見し、大切に保存して下さっている方である。先生には伊勢原に関する私の蒙を啓いていただき、数々の貴重な御教示と史料の提供をたまわった。非力の私がなんとか執筆を遂行できたのも、先生の御援助の

おかげと考えている。先生と山口氏には記して謝意を表したい。

このような経過のもと、ようやくここに本稿を完成することができた。たびたびの延期に深い御理解を示し、お許し下さった宅野宮司と今井秀治責任役員をはじめ役員・関係者の方々には、謝意の表しようもない。ただただ叩頭するばかりである。

最後に、将来ますます大神宮の御社頭が繁栄し、更に大神宮史の研究が深化することを祈念して筆を置くこととする。

平成四年二月十二日　　小松　馨

付、私事にわたって恐縮であるが、当初より私を励まして下さった西野忍総代と御逝去された山田亀雄元総代に深く謝意を表します。

参考文献

村社神明社蔵『神社誌料』
神社本庁所蔵『神社明細書』
『新編相模国風土記稿』（『大日本地誌大系』十七）
伊勢原市文化財協会『伊勢原市内社寺鐘銘文集』（『伊勢原市文化財協会資料集』第二号）
國學院大学所蔵『虚無僧蔵書』
日本大学所蔵『普化宗雑記』
『御府内備考』続編九十三
近藤喜博編『白川家門人帳』
『徳川実記』第二編
『当代記』（『史籍雑纂』二）

鎌田純一校訂『舜旧記』（『史料纂集』所収）
国会図書館蔵『孝亮宿祢日次記』
東大史料編纂所蔵『山科言緒卿記』
『古事類苑』宗教部一
『角川日本地名大辞典』十四神奈川県
『神奈川県の地名』（『日本歴史地名大系』第十四巻）
伊勢原市教育委員会編『小稲葉村古文書』
神宮司庁編『神宮参拝記大成』（『大神宮叢書』所収）
宮地直一『神道史』三（『宮地直一著作集』第七巻）
大西源一『大神宮史要』
小野祖教『神道の基礎知識と基礎問題』
西垣晴次『お伊勢まいり』
西山克『道者と地下人―中世末期の伊勢―』

牛窪弘善『修験道綱要』
石野瑛『相模国中郡伊勢原町八幡台石器時代住居阯群調査記—同郡比々多村古墳群記及び伊勢原町開発史料』
伊勢原町勢誌編纂委員会編『伊勢原町勢誌』
伊勢原市教育委員会編『史跡と文化財のこの町を語る』
伊勢原市史編纂委員会編『伊勢原の民俗』（『伊勢原市史民俗調査報告書』2）
三上参次「普化宗に就て」（『史学雑誌』十三ノ四・五）
『伊勢原の虚無僧寺（照見山神宮寺）を訪ねて』
伊東多三郎「近世に於ける政治権力と宗教的権威、三、普化宗」（『近世史の研究』第一冊、所収）
高橋空山『普化宗史—その尺八奏法の楽理—』
浦本政三郎「普化宗の伝承」（『日本歴史』二十二）
渡辺照洞「神奈川県伊勢原の虚無僧寺—照見山神宮寺—」（『一音成仏』三）
小野鉄朗「近世伊勢原村の町並について」（『伊勢原の歴史』第五号）

松岡俊「幕末明治初期における相模大山御師の思想と行動―神仏分離を中心として―」（『伊勢原の歴史』第五号）
大沢厳『神奈川の古社寺―心の散歩道―』
宇都宮泰長・鈴木隆良共著『大山不動と日向薬師』
奥富敬之編『神奈川県伊勢原市域医療史概観』

大神宮『子供・祭ばやし』

昭和四十三年九月二十一日より

てけ　てん　ドコ　てけ　ドコ　てけ　ドンドン
てけ　てん　ドコ　てけ　ドコ　てけ　ドンドン
てけ　てん　ドコ　てけ　ドコ　てけ　ドンドン
てけ　てん　ドコ　てけ　ドコ　てけ　ドンドン
てけ　てん　ドコ　てけ　ドコ　てけ　ドンドン

このリズムのくりかえしです

大神宮『子供・昇殿くずし』

昭和四十三年九月二十一日より

てん　ドコドン　てん　ドコドン
てん　ドコドン　てん　ドコドン
てけ　てん　てん　てん　てん　てん　てん　てん　てん
ドコドン
てん　ドコドン　てん　ドコドン
てん　ドコドン　てん　ドコドン
てけ　てん　てん　てん　てん　てん　てん
ドコドン
てん　ドコドン　てん　ドコドン
てん　ドコドン　てん　ドコドン

てけ　てん　てん　てん　てん　てん　てん　てん
ドコドン
てん　ドコドン　てん　ドコドン
てん　ドコドン　てん　ドコドン
てけ　てん　てん　てん　てん　てん　てん　てん
ドコドン

このリズムのくりかえしです

大神宮『子供・伊勢原ばやし』

昭和四十四年九月二十一日より

てけ　てん　てん　てん　てん　てん　てん　てん　ドコドン
□　てれ　ドコ　てれ　ドコ　てれ　ドコ　てれ　ドコ

てけ　てん　てん　てん　ドコドン
てん　てん　ドコドコ　てん　ドコドン
○てれて　ドコドコ　てん　ドコドン
てけ　てん　てん　てん　ドコドン
てん　てん　ドコドコ　てん　ドコドン
○てれて　ドコドコ　てん　ドコドン
てけ　てん　てん　てん　ドコドン
てけ　てん　てん　てん　てん　ドコドン
□てれ　ドコ　てれ　ドコ　てれ　ドコ　てれ　ドコ
てれ　ドコ　てれ　ドコ
てれ　ドコ　てれ　ドコ
てれ　ドコ　てれ　ドコ

てけ　てん　てん　てん　　ドコドン
てん　てん　　ドコドコ　てん　　ドコドン
○　てれて　ドコドコ　てん　　ドコドン
てれ　　ドコ　てれ　　ドコ
てけ　てん　てん　てん　　ドコドン
ドドンガドン　　ドドンガドン　　ドコドコ
ドコドコ　　ドドンガドン　　ドコドコ
ドコドコ　　ドン　　ドドンガ　　ドンドン　…

（大太鼓ソロ）

□と□は同じリズム、○と○は同じリズムです。
『□○○□○』と、たたく順番をおぼえてください。

昭和四十二年以降歴代総代名

昭和四十二年以前

谷亀吉光・加藤宗兵衛・高部金三・杉山繁司・村井清・和田豊治・石川清一・金沢政治・池田延太郎

昭和四十二年～四十六年

谷亀吉光・加藤宗兵衛・杉山繁司・高橋浅吉・村井清・平井常治・一見一松・杉田道洋・繁田兼吉

昭和四十七年～四十八年

橋本浩八・高部博是・和田豊治・金沢政治・神崎豊司・田中稲男・広田貞治

昭和四十九年～五十年

青柳万平・高部博是・西野忍・金沢政治・菊村佐一

昭和五十一年〜五十六年

青柳万平・高部博是・西野忍・金沢政治・池田延太郎

昭和五十八年〜六十一年

山田亀雄・大久保幸雄・田中茂夫・今井虎男・長島一夫

注

	掲載事項	説明
あ	天の岩戸	高天原にある大洞窟。岩戸開きの神話はつとに有名。
	天社・国社の制度	神社を天におられる神、地におられる神にわけた一種の社格制度。
	天の真名井	高天原にある天安河の一部の神事に使われる神聖な井戸。
い	衣冠	衣服と冠。束帯につぐ式服。
	今来神	あたらしく来られた神さま。
	忌詞	その言葉の連想が悪いため使うのを避ける言葉。
	伊勢講	伊勢神宮を崇敬しお詣りする目的でつくられた集団。
	伊勢踊り	本文にも出てくるように、お伊勢さまの御神徳に感謝する踊り。
う	氏子	その神さまに守られる地域の人々。

え

保食神（うけもち）　食物の神。

内人（うちんと）　伊勢神宮の旧祠官（神職）の名称で、大内人、小内人の別がある。

お

縁起（おおうちんと）　神社や仏寺の創建の由来（本来は仏教用語からきた）。

大内人（おんみょうどう）　内人の職別の一つで上級職。

陰陽道　古代中国の陰陽五行説に基づき、うらないなどをあつかった術。

か

王政復古　武家政治から、王（日本では天皇）政治に戻ること。

開祖（かんず）　一宗派、寺などを開いた人。

看主（かしこどころ）　看首ともいう。総本山や大寺院の管長。

賢所（かこちょう）　皇居の中にある神殿の中心で天照大御神をまつっている。

過去帳（かいげんくよう）　お寺で死んだものの俗名、死亡年月などを書いておく帳面。

開眼供養（かんじょう）　新たに仏像のできた時などに行なう儀式。

勧請（かりぎぬ）　神さまのおいでを願うこと。ほかの場所にお移しすること。

狩衣（かぐらでん）　平安時代の公家の常服。中世以降公家・武家の礼服になる。

神楽殿（がいせきけ）　おかぐらをあげ祈願するための神社の建物。

外戚家　母方の親戚の家系。

神地・神戸（かむどこ・かんべ）　天社・国社の制度にともなって定められた神社の境内の呼び名。

き

奇瑞（きずい）　ふしぎなめでたいしるし。

祈禱（きとう）　神さまにいのること。

帰依　神や仏を信仰し、その力に頼ること（本来は仏教用語からきた）。

教学　教えの意を学問的にもたせること。

切妻造り　妻は端の意味。棟を中心にしたへの字の屋根。

く

草分け　開拓した最初の人。

供所（くしょ）　供えものをする建物。

熊野先達（くまのせんだつ）　熊野詣などの指導者。先達はとくに鎌倉時代以降全国で活躍した。

鍬山神事（くわやましんじ）　伊勢神宮で行なう神さまの田の種まき神事。

け

検地帳（けんちちょう）　田畑や家などを測量し、その結果を集計した書類。

境内　神社などの信仰の場所。神社の敷地の内などの意。

還俗（げんぞく）　僧になったものが再び俗人に戻ること。「かんぞく」は誤りで「げんぞく」と読む。

外宮（げくう）　伊勢の豊受姫大神の社。天照皇大御神の内宮に対していう。

こ

居士（こじ）　学問はあるが、官につかない人。仏門にあるが僧にならない人。

古儀（こぎ）　昔ながらの儀式や作法。

公儀　朝廷の意から転じて、ここでは江戸幕府のこと。

公地公民（こうちこうみん）　土地はみな公けのもの、人はみな大切な公けのものという考えから出た言葉。

公地公民制　国が公地公民の考えに基づき人々に農地をわけ与えた古代制度。

護法（ごほう）　（仏法などを）まもること。

御家人（ごけにん）　将軍直属の家来。江戸以降は直接将軍におめみえしない家来。

合祀（ごうし）　ほかの神さまを、一緒にあわせまつること。

御神体　神そのもの。神さまのよりしろといってやどられるものをさす。

参詣（さんけい）　神社や寺におまいりすること。

さ

祭祀（さいし）　お祭り、祭典のこと。

衫（さん）　そでなしのじゅばん。

斎服（さいふく）　まつりのとき神職が着る白い服。

祭神　神社でおまつりする神さま。

三節祭　伊勢神宮の九月神嘗祭、六月・十二月の月次祭をいう。
斎宮（さいぐう）　未婚の皇女で、神宮奉仕に専念した方の称号。
参籠（さんろう）　神事奉仕のため、身をきよめるために別生活をすること。

し

神事　神さまの行事の総称。
社殿　神社や寺院にある建物のこと。
神明社　伊勢神宮の御祭神をまつる神社。
鐘楼（しょうろう）　寺の鐘を吊しておく建物。
市廛（してん）　商店街・市場。
神像　神さまの姿を描いた絵や彫物。
神号　神の名称。
神仏分離令　神仏判然令参照。
荘園　貴族や社寺の所有していた土地。
所領　社寺に寄付された土地・領地。
神郡（しんぐん）　郡をもって神さまの年貢料地とするもの。伊勢には神郡が多くあった。
神体　神の霊がやどっているとしてまつるもの。御神体参照。

ち

檀家（だんか）　一つの寺院に属し、祖先の供養などをしてもらい、お布施をする家。

鎮座地（ちんざち）　神社のある場所。

鎮守（ちんじゅ）　その土地をしずめまもる神さま。

茅輪（ちのわ）　茅やわらで人のくぐれる輪をつくり、そこをくぐりぬけることで罪やけがれをはらう。

て

鎮座　ある場所に神社がある（神社ではしずまるという）こと。

転読　お経の要所要所をとび読みすること。

剃髪（ていはつ）　頭髪をそること。お坊さん姿。

天孫降臨（てんそんこうりん）　天照大御神の命によってニニギノミコトが日本の国土に降られたこと。

と

飛び神明　伊勢の大神さまが、突然自ら飛んでいかれどこかに神明さまをつくられること。

な

内宮（ないくう）　天照皇大御神をまつるお社。伊勢のもっとも大切なお社。

名主（なおらい）　江戸時代、一村内をとりしきった人。村方三役の筆頭。

直会　祭りの最後に、神饌のおろしものをわけて膳とし、これを酒食すること。

ね

年中神事　一年の間に定期的に行なわれるおまつりのこと。

は

禰宜（ねぎ）　神職の役職名。宮司に次ぐ役と一般にいわれてきた。
法頭（はっとう）　禅寺で法門の講義をする堂。もしくは一宗の長のこと。
旗本（はたもと）　将軍直属の武士で万石以下のおめみえの士、御家人の上。
廃仏毀釈（はいぶつきしゃく）　明治維新とともに起った、神社から仏教色を排斥する運動。
拝殿（はいでん）　氏子や崇敬者が御本殿の神さまを拝む施設。
幕領　幕府の直接管理する土地。天領。

ひ

火伏せ・火防　火災防止。

ふ

班駒（ふちこま）　ブチ模様の皮の馬。
伏臘（ふくろう）　夏祭りと冬祭り。
普化宗（ふけ）・普化禅宗（ぜんしゅう）　くわしくは本文。仏教禅宗の一派で虚無僧（こむそう）で有名。
封戸（ふこ）　特に所領（神社や寺の領土）を与えられること。

へ

分社（へい）　本社に対し、その祭神をわけてまつったお社。
幣（へい）　みつぎもの・ぬさ。
幣殿（へいでん）　御本殿と拝殿の中間をつなぐ建物。幣などを供える殿社。
別当　この場合僧侶の長。

ほ

奉祭（ほうさい）　神さまをまねいておまつりすること。

掘立柱（ほったてばしら）　土中にそのまま埋めこんだ柱。

奉祀（ほうし）　神さまをある場所におまつりすること。

ま

本山　一宗一派の中心になる寺院。

菩提寺（ぼだいじ）　先祖代々の葬式や供養をするお寺。

秣場（まぐさば）　馬に与えるまぐさをかる所。

末社　本社に対して枝社のこと。境内にある小さなお社。

末寺　本山のお寺に対して、その流派をくむお寺のこと。

み

ミケツ神　食物をつかさどる神さま。

御饌殿（みけでん）　神さまの御食事をお供えする社殿。

御饌（みけ）　神さまにお供えする食事。

御厨（みくりや）　荘園時代における社領の一種。

ミソギ・ハライ　身をきよめて、つみ汚れをはらいおとすこと。

む

村持ち　村が維持管理をする神社。

ムクリ　蒙古から転じ、鬼のようにおそろしいもの及びおそろしい国をさす。

め　棟札（むなふだ）　屋根の一番上の裏側にある由緒を書いた札。

　　銘文　金石などに刻まれた文章。

や　八咫御鏡（やたのみかがみ）　天皇の位を示す三種の神器の一つ。天照大御神から与えられた鏡。

よ　遙拝　はるかに離れておがむこと。

　　黄泉（よみ）の国　死後の世界。天高原、豊葦原中国（この地上）に対し地下の世界を想定される。

り　吉田神道　古い神道の宗家。同家の神道説を卜部神道、唯一宗源神道などという。

　　臨済宗（りんざいしゅう）　仏教禅宗の一派。中国・唐の臨済が起し、鎌倉時代にわが国に伝わった。

れ　例祭　そのお宮の一番中心となるお祭り。

　　霊峰〇〇　神さまがおられると思う山につける尊称。

伊勢原大神宮史

平成四年九月一日発行

著者　小松　馨

編集　㈲葦津事務所

発行　伊勢原大神宮社務所

伊勢原市伊勢原三―八―一　〒二五九―一一

電話〇四六三（九六）一六一一

印刷　三報社印刷株式会社